

日露戦争前の徳富蘇峰とアメリカ（一）

—明治三十年代を中心に—

澤田次郎

はじめに

- 一 アメリカへの接近——日英米同盟論と親米キャンペーン
- 二 アメリカへの共感——エマソンとローツヴェルトの影響……（以上本号）
- 三 アメリカへの不安——日米海上権力競争とマハンの影響
おわりに………（以上八〇巻一一号）

はじめに

徳富蘇峰（一八六三—一九五七）は近代日本を代表するジャーナリスト、歴史家の一人として知られている。

明治二十年代、総合雑誌『国民之友』を主宰し、『国民新聞』を発行して日本言論界に不動の地位を占めた蘇峰は、日清戦争後の明治二十九年（一八九六）から三十年にかけて、一年余りの欧米旅行を経験することによつて新たな視界を開き、精神的、思想的に脱皮しつつ日本へ帰国した。⁽¹⁾

蘇峰が日本に到着したのは明治三十年六月であつたが、それから日露戦争が始まる三十七年（一九〇四）二月までの約六年半の間は、十九世紀から二十世紀への変わり目であるとともに、東アジア、太平洋地域の変動期でもあつた。日清戦争の勝利によつて世界列強の間に台頭した日本は台湾統治を進め、福建省を勢力範囲に置いたが、他方ドイツ、ロシア、フランス、イギリスは弱体化した清国の分割競争に相次いで参加し、大局的には満洲に権益を得たロシアと揚子江流域に権益を得たイギリスが対峙する形となる。その一方で一八九〇年代に目覚しい経済発展をとげ、いわゆる「フロンティアの消滅」を見たアメリカでは、海外膨脹と大海軍の建設を唱える声が上がつた。帝国主義的外交を行うワールドパワーとなつた同国はハワイを併合した上、米西戦争でグアム島、フィリピン諸島を獲得し、さらに清国の門戸開放と機会均等を列強各国に提唱してシナ大陸進出の出遅れを挽回しようとしている。そうした中で義和団が蜂起し、八カ国連合軍が北京に出兵するが、ロシアは義和団事変終了後も満洲に駐兵し続け、日英米三国が抗議を行う中で同地に地歩を固め、満洲還付協約に定められた第一期撤兵を履行せず、加えて韓国進出の気勢を示した。その結果、日本とロシアの間で両国権益の画定交渉が進められたが、妥協に至らず、日本政府は最終的にロシアとの戦いを決意する。

右のように日本の台頭、列強の清国分割、アメリカの西太平洋進出、ロシアの南下と東アジア情勢が進展する中で、蘇峰は年齢でいうと三十四歳から四十歳の壮年期にあたり、心身ともにジャーナリストとしての盛期にさしかかろうとしていた。⁽²⁾ 日露戦争前、彼が社長兼主筆を務める『国民新聞』は、明治三十四年（一九〇一）六月に誕生した第一次桂太郎内閣を支持し、比較的順調に発行部数を伸ばしていた。⁽³⁾ 加えて蘇峰は、単に政府支持の新聞を編集するだけでなく、日露戦争前から戦後にかけて三次にわたつて内閣を組織することになる桂首相との関係を深め、彼自身の言葉によれば、「予は〔明治三十五年一月に成立した〕日英同盟を一の潮合ひととして、身も魂も殆ど桂内閣と云はんよりも、桂首相と一致し、愈々その目的を遂行すべく決心した。……予と桂首相との関

係は、……遂に桂公の死する〔大正二年（一九一三）〕迄継続した」というほどの協力姿勢を示し、実際政治の領域にも足を踏み入れることになったのである。⁽¹⁾ このように明治三十年代は、日本周辺の国際環境と彼自身の政治姿勢の両面において変化が生じた期間であり、蘇峰の生涯と思想を考える上で重要な画期的な時期であったといえる。

よく知られるように、当該期の蘇峰がまず第二次松方正義内閣の内務省勅任参事官に就任し、さらにその後、桂内閣にブレーンとして協力したことから、平民政義を掲げる民間ジャーナリストとしての評価を落したことは一面の事実であつた。⁽⁵⁾ しかしながらそうした中で彼の評論を集めた「国民叢書」は好評を博し、例えはその一つである『人物偶評』については、「蘇峰氏の人物論は現代有数のものなること世の既に識る所」（大阪朝日新聞）、「精細なる觀察」（日本人）、「自在の筆致」（毎日新聞）、「人物の面目躍如」（読売新聞）、「頗る面白し」（報知新聞）、「議論縦横に筆力勇健、読み去つて津々趣味の尽くるを知らず」（中央新聞）、「氏の文に対する時は天清く地潤く神心為に颯爽たるを覚ゆ」（東京日日新聞）、「其論は堂堂其辞は正々其筆は流暢で而も簡潔で、實に我国近來の文壇中稀に見るの好文章である……著者の真文味を知らんとする者、須らく此書を読むべしだ」（京華日報）といつた賛辞が寄せられている。⁽⁶⁾ つまり蘇峰は、一方で変節して藩閥と結託したとの汚名を受けたものの、他方では文筆家としてそれまで通り高い評価を下されていた。明治三十年代の彼は、論壇に颯爽と登場した明治二十年代初めの新鮮味を失いつつあつたが、言論界の雄として無視できない存在感を保つていた。

右のようにメディアの主要人物であり、桂内閣を通じて政治の世界にも働きかける蘇峰は、日本をとりまく国際環境が大きく変動する中で、どのようなビジョンと戦略をもつていたのだろうか。若き日の彼は、中央アジアをめぐる英露対立、いわゆるグレートゲームに注目したが、それから後、英露抗争は東アジアに移り、ロシアの南進と日本ならびにイギリスの抵抗、その結果としての日英同盟の成立を見るに至る。これは蘇峰がかねてから

思い描いてきたシナリオとほぼ一致するものであつた。東アジア情勢の大きな流れは彼の予想通りに進んだといつてよいが、その間、蘇峰は大陸国ロシア、海洋国イギリス、アメリカをどのように見ていたのだろうか。さらにはうした大国の狭間にあって、日本はいかなる進路をとるべきだと考えていたのか。とりわけ着目したいのはアメリカに対する態度である。ロシア、日本、イギリスというゲームの主役に比して脇役に回る傾向にあつたアメリカを、彼らどのように捉えていたか。またそれは後年のアメリカ論にどういった形でつながっていくのか。

本稿では、東アジアのパワーゲームの中で示された蘇峰の対米態度と認識を考察してみたい。

明治三十年代の蘇峰については、もともと先行研究が少ない傾向にある。その前段階である二十年代の彼については、平民主義から国家主義、帝国主義への思想的変容ないしは転向という観点を中心として、多くの研究者が努力を傾注し、貴重な知見を積み上げている。それに対して三十年代の蘇峰は、政治姿勢に変化は見られるものの、思想的な変容はすでに遂げた後であると考えられたためであろうか、先学、とりわけ政治思想研究者の関心をそれほど集めているわけではない。本稿は、しかしながらそうした中で発表された比較的わずかな先行論考を参考とし、そこから示唆を得つつ、管見の及ぶ限りではこれまでほとんど論及されてこなかつた蘇峰のアメリカ観に光を当て、分析を試みるものである。⁽⁸⁾ 約百年前の東アジア問題と日本人の対応を検討することは、現在のそれを考へることにもつながるのではないかと思われる。

一 アメリカへの接近——日英米同盟論と親米キャンペーン

明治二十八年（一八九五）に日清戦争が終了して以来、ドイツ、ロシア、フランスの清国に対する外交的圧力は強まり、三十年六月に蘇峰が欧米旅行から帰国した直後、それはいよいよ激しくなつた。同年十一月、ドイツ

の膠州湾占領を手始めに、列強のシナ分割競争が本格化し、翌三十一年、ドイツの膠州湾租借（三月）、ロシアの旅順、大連租借（三月）、フランスの広州湾占領（四月、租借は翌年十一月）が相次ぎ、そうした動きに対抗してイギリスも威海衛を租借した（七月）。次いで三十二年、英露は協定によつて鉄道敷設権の範囲を定め、長城以北はロシア、揚子江流域はイギリスとして相互に勢力範囲を確認する。

こうした西洋列強の勢力拡大が日本の利益と安全にダメージを与えることを危惧した蘇峰は、ロシアの南下を抑えるためとして日本軍の威海衛駐留を提案し、イギリスが同地を租借した後は、他国之力が台湾に及ばないよう対岸の廈門を租借し、そこに專管居留地を置いて日本の勢力を福建省に扶植するよう訴えた。列強の清国分割に対抗して日本も大陸へ膨脹し、拠点や勢力圏を作ることによつて列国の勢力拡大を抑え、日本がバランスーとなつて清国の安定をはかりながら自国の利益を確保するというのがその考え方であつた。⁽⁹⁾ このように東アジアの変動に対して蘇峰は、まず日本の利益を自力で保証するための方策を提唱した。

清国を標的にした列国の中で蘇峰が最も警戒したのはどの国であろうか。それは、東進南下政策と三国干渉によって彼に脅威を与え続けてきたロシアであることはいうまでもない。したがつて次に蘇峰は、ロシアの南進と満洲の権益独占を厭う点で日本と利害が共通する国、すなわちイギリス、アメリカと提携することが戦略的に有利であると判断し、「日英米同盟」論を提唱するようになる。

その兆しは以前より存在した。明治二十年代半ばから、蘇峰とその率いる『国民之友』『国民新聞』は、ロシアの東アジア進出を警戒し、それに圧力を加えるため「日英同盟」の実現を示唆もしくは明言するとともに、蘇峰自身、アジアの英領植民地やイギリス、ヨーロッパ大陸を回つて日英同盟工作、反ロシア包围網工作を試みた。⁽¹⁰⁾ 加えて彼は「日米同盟」を唱え、日本とアメリカが商業上の交流を通じてそれぞれ太平洋の女王となり、共存共榮するよう主張していたのである。今日の視点から日英同盟、日米同盟という、軍事的な共同行動や参戦義務

を明記した同盟条約を想起しがちであるが、蘇峰は香港、シンガポールに海軍根拠地をもつイギリスとは軍事上の協力を望んだであろうが、モンロー主義の伝統があるアメリカにはそこまで期待はしていなかつたと考えられる。また公の場で英米との軍事協力を明言することはロシアを必要以上に刺激する可能性もあつた。したがつて彼はそうした文言を避け、むしろ国家が何らかの共通目的のために同一行動を盟約する、あるいは盟約までしなくともしつかりした協同歩調を意識的にとるといった、より幅広い意味合いから同盟の文字を用いていた。本稿では蘇峰の記した通りにこの同盟の語を引用するが、そこに現代的解釈をそのままあてはめないよう注意したい。右のように従来からイギリス、アメリカとの協調を模索してきた蘇峰は、明治三十年秋に列強の清国分割が始まると、二つを合せた形の日英米同盟論を唱え始める。それを要約すると次のようになる。

極東が平和であれば、日本、イギリス、アメリカが最大の利益を受ける。この三国が協力して極東平和を維持するというものが自分の素論だ。イギリスは無限の富を藏するシナの対外貿易中、十分の八を受け入れる。アメリカは日本の輸出総額十三億円のうち五億円を受け入れており、極東はアメリカの貿易相手としてとりわけ有望になるだろう。他方、日本とシナは一衣帶水を隔てて互いに近接する。もし一、二の国がシナを取り、そこに貿易上の障壁を築くならば、日本米の受ける損害は測り知れない。今日の計は、日英米の一致によって極東平和を守り、その危害を予防することである。その際、最重要の問題は、シナを列国に分割させるか、それとも一つの国家として存続させるか、そのどちらかを選ぶことだ。極東の均勢から見れば、シナの存在を維持することがぜひ必要であり、そのためには同国を導いて進歩させなければならない。日英米が固く確かな意思をもつて極東平和を擁護し、シナの改良を図れば、その他諸国は勝手な行動を採ることはできない。自分は日英米三国が一致協力してこの方針に向かい、世界禍乱の源を封じるよう切に希望する。⁽¹²⁾ それは三国の利益だからである。

これによると、イギリス—東アジア（シナ、日本）—アメリカは商業を通して結びつき、その中心にあるシナ

は資源の宝庫であるが、もし列強（とりわけロシア）がシナを侵蝕し、その経済的独占を図るならば、右のリンクは切断され、貿易立国である日英米の損失は莫大なものとなる。そこで三国が足並みを揃えて衰弱した老大国シナを誘導し、列国の干渉をチェックすることによって大陸の均勢（バランス・オブ・パワー）を保つならば、その平和と日英米の国益は共に守られるというのである。蘇峰自身は地政学の用語を用いていないが、要するに海洋国（シーパワー）の日英米が清国の安定とそこから引き出せる利益のため、大陸国（ランドパワー）のロシア、あるいはドイツ、フランスを抑え込むというわけである。この基本的構図のイメージはその後も変わらず、ロシア（ソ連）、あるいはシナに対し、日本、イギリス、アメリカがトライアングルの協調関係を保つならば、東アジアの安定と三国の繁栄が達成できるという視座は、彼の心から消え去ることがなかつた。したがつて後年、日本が英米との戦争に至つたのは、蘇峰の主觀からすれば初志に反する不本意なこととされたのである。⁽¹³⁾

ここで疑問が一つ生じる。蘇峰は列強争奪の舞台となつた清国自体との協同は考えなかつたのであらうか。結論からいえば、彼はそうした意見を説くどころか、むしろこれを危険であると退けた。日清があからさまに提携すれば、欧米人の間に流れている黄禍論の風説、すなわちアジア黄色人種が西洋白色人種の優越を覆すのではないかとの警戒論に火をつけ、西洋人をいたずらに刺激することになると心配したからである。同じころ貴族院議長の近衛篤磨が日清の「同人種同盟」を作ることに言及すると『国民新聞』は、ただでさえドイツ皇帝ヴィルヘルム二世（Kaiser Wilhelm II, Friedrich Wilhelm Viktor Albert）が黄色人種の脅威を餌にして欧州内の争いを外に転じようとしているのに、そうした中で日本、シナの二大黄色人種の結束を訴えるのは危険であると力説した。⁽¹⁴⁾蘇峰自身も、日清提携が欧米人を刺激して東洋対西洋という対立観念をことさらに煽るようになれば、イギリス、アメリカをも敵に回すことになりかねない、日清同盟などあり得ない、英米こそがわが「良朋」であるとして、在日西洋人の目を意識しつつ、欧米とくに英米両国における黄禍論の燃え上がりを未然に防ごうと注意

を払つた。⁽¹⁵⁾

以上のように蘇峰は、ロシア（および独仏）がシナ大陸で威を振るうことを阻止するためにイギリス、アメリカとの同盟を提唱するとともに、西洋諸国が黄禍論で結束したり、英米が反日に回ることがないよう、国内外の世論を誘導しようと試みた。彼の日英米同盟論は、第一に英米を利用して東アジアのロシア勢力拡大を抑制し、第二に反日で固まる可能性のある欧米諸国間に日本が割つて入り、そこに一種の楔を打ち込むという二重のメリットがあつたといえよう。

蘇峰はこのように戦略的に有用なイギリス、アメリカとの同盟論を機会ある」とに主張してやまなかつた。例えば、明治三十二年九月付でジョン・ヘイ（John Hay）米国務長官が英、独、露、ついで仏、伊、ベルギー、日本（十二月付）に対して清国の門戸開放通牒（「商業上の門戸開放政策に関する宣言」）を送付した際である。周知のようにこれは、列強が清国に有する勢力範囲や租借地において、他国の既得権益に干渉したり、関税、港税、鉄道運賃につき他国に不利な待遇を与えないよう求め、清国の市場を通商上、均等に開放することを目的としたものであつた。さらに翌三十三年、義和團事変の混乱に際してヘイ国務長官は第二次通牒を列国に送り、清国のみの門戸開放に加えて領土保全を要請した。こうしたアメリカの積極的姿勢を受けて蘇峰は、同国を「最も公平なる、且つ頼母敷友邦」と呼び、「門戸開放、支那保全は、我が国が英米諸国と与に、全心全力を以て、翼賛する政策」であるとして英米両国との「提携」を強調し、もし他国がシナの一部で門戸を閉鎖すれば、わが国はそれを座視し得ないとしている。⁽¹⁶⁾

一方、欧洲列国の清国進出に対して英米でも警戒が強まり、それと同時に日本との協同が説かれるようになる。イギリスでは政務次官ジョージ・N・カーボン（George Nathaniel Curzon, 1st Marquess Curzon of Kedleston）が、「もし極東でヨーロッパ列強が反英で固まりつつあるならば、多分我々は遅かれ早かれ、日本と共に行動せ

あるを得なくなるだらう」と首相のソールズベリー (Robert Arthur Talbot Gascoyne-Cecil, 3rd Marquess of Salisbury) に書き送り、前海相ジョン・P・スペンサー (John Poyntz Spencer, 5th Earl Spencer) やロバート・ジヤパン・ソサエティや、日英は互いに励まし合う競争関係にあり、将来イギリスが日本と同じ側にある」とを望んでいたと語った。⁽¹⁷⁾ やがて植民地相ジョゼフ・チャンバレン (Joseph Chamberlain) が極東における日英の提携や利害一致についてコメントすると、ロバート・ジヤパン・『タイムズ』 (Times) を通じてこれを知った蘇峰は「快心の一事」、「いかにも祝うべき」と歓迎している。リチャード・チャンバレン等は、日本との狭義の同盟 (alliance) をストレートに主張しているわけではなく、あくまで両国の協力について言及したにすぎないが、イギリスから日英協同の声が届くのは蘇峰にとり喜ばしいであつた。⁽¹⁸⁾ 加えてアメリカでも日英米提携論が登場したことを聞いた彼は、これで英米両国では日本との協力が輿論になつたとして満足の意を示した。⁽¹⁹⁾

その後、明治三十五年（一九〇二）一月、日英同盟協約が実際に成立することによつて、蘇峰の希望は半ば達成される。世界第一の海軍国との同盟が日本国民を過度に安心させることがあつてはならないと用心する彼は、あえて手放しの喜びは見せなかつたが、宿願の実現に満足したことはいうまでもない。⁽²⁰⁾ またアメリカの『インディペンデント』 (Independent) 誌が日英同盟を支持したことを聞くと、米国の「好意」を指摘し、やがて別の個所でも、アメリカの国柄（モンロー主義）からつて他国との同盟は容易にできるものではないが、その目的とする所は日英と全く同一であるとして、アメリカとの連帯感をくり返し強調した。⁽²¹⁾

右のようすに蘇峰は、日英同盟協約と同じく明文の裏付けをもつて日米を結びつけるのは、実際には難しいと考えていた。そこで彼はこの欠落を埋めて日米関係を強化するべく、自ら親米キャンペーンを実施した。その顕著な例は、ペリー上陸記念碑建立の際、典型的に表れてゐる。リチャード・マザード・ビアズリー (Lester Anthony Beardslee) が十三年（一九〇〇）十月末、アメリカの退役海軍少将レスター・A・ビアズリー (Lester Anthony Beardslee) が

来日した。ビアズリーは嘉永六年（一八五三）、マシュー・C・ペリー（Matthew Calbraith Perry）准将が久里浜に来航した時、米艦四隻の一つブリマスに少尉候補生として乗り組んでおり、その後も海軍士官として四五回、日本ないし日本近海を訪れ、最後は太平洋基地司令長官（Commander-in-Chief of the U.S. Navy forces on the Pacific Station）を務めた後、退役した。⁽²³⁾ それから約二年半後、ビアズリーは観光のため夫人同伴で来日し、思い出深い久里浜の地を約四十七年ぶりに訪ねた。ペリー上陸地点に相応の史蹟が置かれていると思い込んでいた彼は、そこに何もないことに驚き、芝公園紅葉館で開かれた米友協会の歓迎会においてその思いをスピーチした。これに応えて米友協会はその場で久里浜に上陸記念碑を立てる事を決定し、寄付金の募集と建設準備に着手した結果、翌三十四年六月末までに明治天皇の下賜金千円に加えて二万円余が集まり、建立が実現した。⁽²⁴⁾

明治三十四年七月十四日、ペリー上陸と同じ月日に合わせて記念碑の除幕式が行われる。土台を含めて高さ約十メートルに及ぶ石碑には、伊藤博文の筆による「北米合衆国水師提督伯理上陸紀念碑」の文字が刻まれ、日本側参列者は金子堅太郎米友協会会长、桂首相をはじめとして文相を除いた各大臣、海軍から西郷従道元帥、山本権兵衛海相、伊東祐亨海軍軍令部長以下三十余名、陸軍から大山巖元帥、児玉源太郎陸相、寺内正毅中将以下數十名、その他に内田康哉外務省総務長官、財界から渋沢栄一、大倉喜八郎、浅野総一郎、あるいは東京府知事、神奈川県知事、警視総監、貴衆両院議員、新聞通信社員など、アメリカ側参列者はアルフレッド・E・バック（Alfred Eliab Buck）駐日公使が病気欠席したものの、その他の公使館員、武官、横浜総領事、ビアズリー退役少将、ペリーの孫にあたるアジア基地司令長官（Commander-in-Chief of the U.S. Navy forces on the Asiatic Station）代理フレデリック・ロジャース（Frederick Rodgers）海軍少将、ダグラス・マッカーサー（Douglas MacArthur）の父にあたる前フィリピン初代軍政総督アーサー・マッカーサー・ジュニア（Arthur MacArthur, Jr.）陸軍少将などで、両国の顯官名士あわせて約四百名が参列し、久里浜湾には米海軍アジア基地の旗艦ニュ

ヨーク（装甲巡洋艦）を含む三隻、日本海軍の敷島、初瀬（いすれも戦艦）を含む五隻がそれぞれ満艦飾を施して整列し、祝砲を轟かせた。

右のような経緯の中で蘇峰は、米友協会が記念碑建設の動きを見せると直ちに賛同し、これは適當な思いつきである、「願くは之を以て、日米の交情の、長く久しう渝（かわ）らざるの紀念標たらしめんことを」と声援を送つた。⁽²⁵⁾ その後、上野精養軒においてピアズリー退役少将の歓迎会が加藤高明外相、バッカ公使以下、各界名士五百余名を集めて開かれると、蘇峰もこれに出席し、園遊会は児事な成功だった、わが国が半世紀足らずで長足の進歩を遂げたのはその文明の淵源が深く厚いからにせよ、米国に負うところが浅くない、「吾人は決して忘恩の国民たる可らざる也」とアメリカの恩義に謝した。⁽²⁶⁾

加えて記念碑序幕式に米アジア基地司令長官代理としてペリーの孫ロジャース少将の来航が伝えられると、蘇峰は事態がここまで大掛かりになつた以上、これは米友協会だけでなく国家の事業であるとして政府支援を促し、⁽²⁷⁾ 次のように述べて日米友好ムードの盛り上がりに拍車をかけようとした。

……彼理（ペリー）提督上陸紀念碑に対する、我が国民の同情の如きは、畢竟するに我が国民が之によりて米国に対する、国民的好意を表彰せんとするに外ならざるのみ。吾人は之れによりて、長へに日米親睦、極東の政局に於ける、両国戮力の紐帯たらんことを希望せんば非らず。……蓋し日米両国が、文明、平和、人道の為めに、左提右挈するは、世界の平和を増進すべき要素たるを以てなり。

記念碑が日米協力のきずなになつてほしい、日本とアメリカが左提右挈（さていゆうけつ）、すなわち互いに手を取り合うならば、極東ひいては世界の平和を進めることができるというのである。このように日米友好ムードの醸成に努めた蘇峰は、記念碑序幕式に自ら参列することによつて、読者にその模様を伝えようとした。当日の

朝、横浜港で式典参列者のために用意された博愛丸に乗船した彼は雨が降る中、久里浜沖に到着する。博愛丸から小蒸気船に移り、日米の海軍旗が交差する桟橋に上陸すると、直ちに前方が式場入口となつてお、日米両国旗が交差した緑門をくぐると、正面に白幕に覆われた記念碑が聳えていた。会場の四方には紅白横縞の幕が張られ、記念碑の左右に来賓席、それと向かい合う形で一般参列者席が置かれ、碑の裏手には食堂が設けられている。両国要人がこの広場を埋め尽くす中、式は開始されたが、途中激しくなつた雨が天幕を滝のようになに流れ落ちるほどであった。海軍軍楽隊の君が代奏上とともに金子会長に導かれたロジャース少将が白幕を引き、記念碑が姿を現すと会場は喝采でどよめき、両国軍艦の祝砲が後方の山々に響き渡つた。海軍儀仗兵による捧銃式が行われた後、両国代表者の祝辞が続き、セレモニーは無事終了した。蘇峰は式典がよく準備され、記念碑も思いのほか立派にできていると感じ、横浜への帰路、博愛丸に乗り合わせたアメリカ人参列者、とくに女性たちが除幕式に強い満足を示しているのを聞いて、心の底から欣喜に堪えない、博愛丸はその名の通り日米両国民の博愛精神を満載している、「此会の影響が、日米交際上に、健全なる感化を及ぼすの多大なるを推想すれば、更らに欣喜禁す可からざるものあり」と読者に報告した。⁽²⁹⁾

このように蘇峰はペリー上陸記念碑の建設を支持し、アメリカとの友好感情を温めることに努めたが、ここで疑問となる点がひとつある。もともと彼は少年期（明治初年）から明治二十年代末期に至るまで、「日本人を侮辱する傲慢なアメリカ人」に対して憤りを抱き、中でもペリーが砲艦外交によつて日本を強制的に開国したことへの怒りと屈辱感は根深く、強烈なものであつた。⁽³⁰⁾ したがつて記念碑をむしろ国辱の象徴として糾弾してもよいはずなのに、上記のような態度に出たのはなぜであろうか。また米友協会だけでなく明治天皇、桂首相以下の各界リーダーたちがこそつて記念碑建立に前向きの姿勢を示したのはなぜか。蘇峰らの言動の背景に透けて見えるのは、ロシアの東アジア進出と欧米諸国に流れる黄禍論の風説という二つの事情である。日清戦争後、東清鉄道敷設権、

旅順・大連租借権、南満洲鉄道敷設権を手に入れたロシアは、明治三十三年六月、義和団事変が生じると、義和団によって破壊された建設中の東清鉄道の保護を名目として満洲を占領し、翌三十四年三月、満洲からの撤退条件として清国に対し、満洲、蒙古、中央アジアにおける権益の独占と北京への鉄道敷設権を要求した。このようなロシアの動きに対し、日本は清国にロシアの要求を拒否するようくり返し勧告し、英米両国に対してもロシアに特殊権益を与えないよう働きかけるほか、清国の門戸開放、領土保全に関する英独協定に加入を通告し、その後、イギリス側の働きかけによって日英独三国同盟の可能性が検討されるようになり、これが日英同盟協約の締結へとつながっていく。そうした中で蘇峰は、「満州の妖雲は、日に増し清国を蔽はんとす」と警戒の念を募らせ、ここに至ればわが国は自衛のため、やむを得ず「一国の運命を賭しても、争はざる可らざる必要に迫るも、未だ知る可らず」として、ロシアとの対決を予感するようになっていた。³¹⁾

一方、三国干渉以来、日本の指導層が西洋における黄禍論の広がりを警戒したことは、先行研究が指摘する通りである。³²⁾これは蘇峰も同様であり、明治三十年代に入り、ロシアだけでなくイギリスの『スペクティター』(Spectator)誌、アメリカのニューヨーク『ヘラルド』(New York Herald)紙などが反日黄禍論を唱えることに彼は苦々しさを感じ、こうした意見が勢いを増せば、日本が欧米主導の国際社会で孤立し、英米両国からも協力を得られなくなるという不安を感じていた。³³⁾加えてアメリカ西海岸やイギリス帝国内（カナダ、オーストラリア）で、清国人に統いて日本人の移民に対する排斥の兆しが生じていることも、蘇峰には気がかりであった。³⁴⁾

ビアズリー米退役少将の来日からペリー上陸記念碑完成までの九ヶ月間（明治三十三年十月～三十四年七月）は、義和団事変後のロシアの満洲占領とそれに対する日本政府の苦慮の時期、ならびに欧米における黄禍論拡大の時期と重なっていた。そうした中で蘇峰と日本の指導者たちは、一方でロシアの動きを注視しつつ、他方でアメリカに友好のシグナルを送ったのである。国際環境の厳しさを実感する日本側にとって、記念碑事業はアメリカ側

の好意を引き寄せる絶好の機会であった。それだけに高平小五郎駐米公使も記念碑建設の動きに注目し、アメリカ人一般はこれに「非常ノ満足ヲ表シ居リ候」と報告しただけでなく、この際、ロジャース少将に相当の待遇を与えて歓待し、「両国ノ交誼ヲシテ益々親密ナラシムル」よう、また除幕式ないし記念碑の写真を扁額に入れて米友協会から大統領、米政府に寄贈するよう本省に要請している。日米友好を維持することは「便利」であり、こうしたチャンスを「利用」すべきだというのが高平の考えであつた。⁽³⁵⁾ 同じように蘇峰が記念碑建立を支持し、日米間の親善ムードを盛り上げようとしたのは、単なる感傷や情緒的な思い入れからではない。ロシアへの抵抗、アメリカとの協力という国家戦略を見据えた上で、心中の怒りをあえて押し殺し、冷厳かつ意識的に行つたものと考えられる。彼は自己のメディアを通じて親米感情が国内だけでなくアメリカ側にも伝わることを期待、計算していたであろう。親米キャンペーンはあくまで彼の日英米同盟工作の一環をなすものであつたといえる。⁽³⁶⁾

蘇峰の対米友好戦術は以上にとどまらず、彼は機会あることにこれを試みている。例えば『国民新聞』紙上では日英米同盟論、日米親善論を唱えるだけでなく、次章で取り上げるように、思想家ラルフ・W・エマソン (Ralph Waldo Emerson) と政治家シオドア・ローズヴェルト (Theodore Roosevelt) の名をしばしばあげて、読者の親近感を深めようとし、それ以外にも、折に触れてはヘンリー・W・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow) のような文人、エドワード・S・モース (Edward Sylvester Morse) のように日本で活躍した知識人、鉄鋼王アンドルー・カーネギー (Andrew Carnegie) のような実業人、あるいは蘇峰自身が欧米旅行で懇意となつたアメリカ人を好意的なトーンで紹介し続けた。⁽³⁷⁾ そうした人物の中でとくに着目したいのは、メリマン・C・ハリス (Merriman Colbert Harris) 牧師とアルフレッド・E・バック駐日公使である。この二人は当該期の蘇峰が実際に交流し、かつ日米友好に活用したもつとも代表的なアメリカ人だからである。

まずハリス牧師であるが、明治三十年六月、サンフランシスコ滯在中の蘇峰は、ハリスとはじめて出会い、そ

の温厚篤実な人柄に強い感銘を受けた。このとき蘇峰は、同市パイン・ストリートのメソヂスト教会においてヘイト青年会（日本人キリスト教青年会）のために講演を行い、その際、日米親交の必要性を説くと、ハリスは声をあげてそれに賛同したという。以後、大正十年（一九二二）にハリスが亡くなるまで、両者は二十四年間にわたって温かい交友関係を結んだ。⁽³⁸⁾帰国のためサンフランシスコ港からペルー号に乗り込んだ蘇峰は、見送りに来たハリスと船上で握手を交わしたが、それから一年後の三十一年六月、思いがけずハリスが来日することになった。日本におけるメソヂスト教会設立二十五周年を記念する祝賀会に参列し、合わせて仙台や京都を訪ね、十二年ぶりに日本伝道の状況を視察するためであつた。⁽³⁹⁾蘇峰は早速『国民新聞』でその訪日を伝え、ハリスがその前年の明治三十年、サンフランシスコ市学務局が日本人の公立学校入学を禁ずる決議をした際、これを調停して取り消しに至らしめたこと、また同市の日本人青年を大切にし、彼らの師父、友人のような存在であることを指摘した上で、日本の「好友」、「真個有徳の君子」であるハリス氏の来京を歓迎しなくてはいけない、日本政府は氏の功労を認めて勲章を授与する義務があるとした。⁽⁴⁰⁾さらに明治三十四年、ハリスが改めて来日すると、その「献身的精神」を称え、帰国の際には片岡健吉、江原素六、島田三郎、本多庸一らのキリスト教関係者約四十名とともに、送別会を設けてスピーチを行つてはいる。⁽⁴¹⁾その後も蘇峰はハリスを敬愛し続け、素直な気持で彼を称えるとともに、その人柄や発言を読者に披露し、友好工作に活用することによつて、日米親善ムードの増進を図つたのである。一方、ハリスの側も親日的な言動によつて蘇峰の交情に応えた。日露開戦直前の明治三十七年一月末、蘇峰はハリスから次のような書簡を受取つたといふ。⁽⁴²⁾

私たちは日々、天に向かつて平和が來ることを祈つてゐます。しかし、もし戦争が起きるならば、願わくば日本が代表して立つ正義に勝利を与えよ。私は日本の勝利を信ずるもので。しかしながら、ああ、日本をしてその生存上、や

むを得ず戦争に至らしめるとは、嘆くべきことです。けれども、天の摂理はこの戦争によつて新鮮な気魄と崇高な生活を日本国民に与えることと思います。……アメリカの同情は全く日本に傾いています。

日本を支援するこのハリスの手紙を読んだ蘇峰は、わが帝国が正義の立場にあり、生存のためやむなく剣を抜くに至つたことは世界の大君子に了解された、わが国民は猛進してよいのだと勇気づけられた。⁽⁴³⁾ 既に述べたように、欧米の黄禍論に触れるたびに異人種、異文化の国としての日本の孤立を意識せざるを得なかつた蘇峰にとって、ロシアとの戦いを目前にこうした声援を受けるのは、戦略的に有益なことであつた。日露開戦直前ならびに戦中のアメリカ国民が、このハリス書簡と同様に、日本に同情を傾けたことはよく知られる通りである。蘇峰はそうしたアメリカ側の態度を知ることによつて、たとえ条約上の同盟はなくとも、日本とアメリカは事実上、準同盟国のような間柄にあると考へることができたのである。⁽⁴⁴⁾

次にバック駐日公使である。先述のように蘇峰は明治三十年六月、帰国ためサンフランシスコを出港したが、このときペルー号船上に見送りに来たハリス牧師から、日本に公使として赴任する途上のバックを紹介された。このバックとの出会いは蘇峰の欧米旅行中、最大の土産の一つとなり、以来、彼はバック夫妻と「隔てなき友人」になり、アメリカ公使館とも「親密」になつたといつ⁽⁴⁵⁾。帰国早々、内務省勅任参事官に就任した蘇峰の下には、早速バックから祝状が寄せられた。⁽⁴⁶⁾ 加えて三十二年、いわゆる陸奥改正条約（明治二十七年調印）が実施され、安政四年（一八五七）以来、欧米各国に認めてきた領事裁判制度の廃止によつて日本は法権を回復することになつた。これに際してバックが在日アメリカ人に、以後日本の法律、習慣を敬重するよう布告を出すと、蘇峰は、いかにも時を得た告示である、タウンゼンド・ハリス（Townsend Harris）に始まる不平等条約とその改正交渉はこれで〔半面において〕終了した、バックは日米親交のための好使者であると称賛している。⁽⁴⁷⁾

また蘇峰はバツクと日米関係についてしばしば話し合い、「国民新聞」がアメリカに好意を持つこと、また将来の東アジア発展にアメリカが最大の力を尽して欲しいこと、日本はそれを妨害するどころかむしろ進んで招致し、日米協力によつて共通の利益を進めたいことを話すと、バツクは強い賛同を示したという。⁽⁴⁸⁾ 蘇峰はバツク夫妻を「我が最友誼国の代表者」と呼び、その言動をたびたび読者に伝えていたが、これに応えてバツクも「合衆国代表として私に与えて下さった高い称賛にとても感謝しています」との礼状を蘇峰に送っている。⁽⁴⁹⁾ 加えて蘇峰はバツクの妻、エレン・B・バツク (Ellen B. Buck) 夫人への心配りも忘れず、彼女に菊の花を贈つて喜ばれたが、夫妻とともに観菊会に出席して菊の品評をしてみせるといった一幕もあり、夫人は読書好きで敬虔な人物であると好もしい筆致で読者にも紹介している。⁽⁵⁰⁾

明治三十五年十二月、鴨獵を楽しむため千葉県の新浜御料地（現市川市内）を訪ねていたバツクが病氣で倒れ、急逝すると、日本政府は手厚い対応に努めた。バツクの葬儀は築地トリニティ教会で行われたが、柩の左右には天皇からの勅使、皇后からの御使がそれぞれ座を占め、小村寿太郎外相も参列した。また儀仗兵として第一師団から兵員二分の一が割かれ、軍楽隊も用意され、祈禱の際には弔砲が打たれた。式終了後は築地明石町の同教会から新橋駅まで行列を組んで柩を送っている。米海兵隊員によつて担ぎ出された柩は、日本の騎馬警官、軍楽隊、儀仗兵に先導され、その後を米公使館員、さらに勅使、御使、各大臣、東京府知事、警視総監などが続き、行列は蕭々と進んだ。新橋駅には日本側の費用負担で特別列車が準備され、横浜まで運ばれた柩は四十日間を経てワシントンDCに到着し、同地駅頭で高平駐米公使等に出迎えられ、アーリントン国立墓地での葬儀には高平も参列した。⁽⁵¹⁾

亡きバツクに対しても、このように日本側がきめ細かい配慮を示した理由は、小村外相が高平公使に宛てた次の言葉に表れている。「出来得ル限リノ便宜ヲ計リタルハ全ク帝国政府カ米国ニ対スル多年交誼ヲ表センカ為メニ外

ナラザル次第ニ有之候」。⁵⁴ こうしたアメリカへの厚情は、同国が日本に友好的であったことへの返礼の意味合いもあろうが、それだからといって単にナイーヴに表出されたものではなく、ペリー上陸記念碑の場合と同様に、その背後にはロシアの満洲進出と黄禍論という影があり、それに対処するため意図的に示されたものであることはいうまでもない。この点は蘇峰も同様であつた。米公使館より通知を受けバックの葬儀に参列した彼は、そのときの情景を新聞紙上で次のように伝えている。

天地暗澹、四辺何となく悲哀の觀を呈し候。而して会堂外には、帝国の精銳たる儀仗兵あり。堂内には、列国外交諸官、内閣諸大僚、其他何れも大礼服にて、綺羅星の如く、而して莊嚴なる唱歌、莊嚴なる葬詞、實に這の篤実なる老紳士の最後の見送りとしては適當に有之候。……公使は實に自國の良公使たりしのみならず、亦た我國の良友たりし也。我が官民の公使を知るもの、何れも其の忠直、寛厚なる人格と、其の常識に饒み、且つ公平なる資質とに就て、識認、敬愛せざるものはなかりき。

さらに蘇峰は以下のように続ける。バック公使が日本に赴任した当時は、アメリカのハワイ、フィリピン併合に伴い、場合によつては日米関係にひびが入らないとも限らなかつた。しかしバックはそうした面倒な事態に対して、「正直は最善の政略である」の教訓を実行し、自国の利益と信用を増進しただけでなく、日本の官民から友人として敬愛された。米公使にバックという人物を得たからこそ、日米「衝突の機会」は避けられたのだとう。このように蘇峰は追悼したが、後に残された夫人に対しても、天が未亡人に恩寵をもたらすようにと記して配慮を示すことを忘れなかつた。⁵⁵

蘇峰は新聞記者であるが、もともと社交が好きなタイプではなかつた。しかしそれを押してバック夫妻やアメリカ公使館との交際を維持しようとしたのは、バック個人に好感をもつたからだけでなく、日米間の友好感情を

厚くしたいという希望があつたからであろう。したがつてバツクの死後、二名の臨時代理公使を経て、明治十六年六月、ロイド・C・グリスコム（Lloyd Carpenter Griscom）が公使に就任すると、蘇峰はグリスコムとも同様の関係を保とうとし、アメリカ公使館の招待にはできるだけ応じるようにするのである。⁽⁵⁶⁾ なお彼は、イギリスについても、アメリカの場合と同じように親英キャンペーン、日英友好工作を試みていることも付け加えておこう。⁽⁵⁷⁾

以上のように、蘇峰はペリー上陸記念碑の建立、ハリスやバックとの交流に見られるように、機会を捉えては日本とアメリカの友好イメージを積極的に描き出し、『国民新聞』を通じて読者にアピールした。彼は漠然と抽象的な平和、エモーショナルな友好を求めたのではなかつた。その裏には、自国の利益を守ることが外交の第一義であるという考え方があり、「外交問題には、感情は無用也、否な有害也。何処迄も利害打算の乾光に照らし、其の宜しきを取りて之を行はざる可らず候」⁽⁵⁸⁾ という冷徹な姿勢が存在したのである。こうした立脚点に立つ蘇峰は、ロシアの東アジア進出や反日黄禍論を前にして国難を感じ、ロシアの膨脹を抑えるためには、イギリス、アメリカとの協力が必要であると判断した。つまり彼には、ランドパワーのロシアを封じ込めるという大目標があり、そのためにシーパワーのイギリス、アメリカと提携し、かつ欧米に流れる黄禍論の害を抑えて英米を日本側に引きつけておくという戦略があり、そのために『国民新聞』ないし実際行動を通して日英米の同盟、親善工作を推進するという戦術があつた。このように見ると蘇峰の言動は首尾一貫しており、その根底にはある一つのものが貫かれていたことがわかる。それは、東アジア情勢の変転の中で日本の安全と利益を守るという堅い意志である。

二 アメリカへの共感——エマーソンとルーズベルトの影響

蘇峰が協調の相手先としてイギリス、アメリカを選んだのは、満洲の門戸開放を求める点で日本と共通し、国力、世界における地位と発言力からといってロシアを牽制するのに利用価値が高かつたからである。つまりその日英米同盟論は日本の戦略上導き出されたものであったが、それと同時に興味深い点を指摘しておきたい。それは、蘇峰の押し進める議論の中にイギリス人、アメリカ人の考え方や精神が織り込まれており、そこに英米との心理的な結びつきの強さを見る事ができる点である。彼は英米を外交的に利用しようとしたが、それだけでなく英米人から取り込んだ価値観、スピリットを活用しながら両国との同盟論、あるいは対ロシア論を説いた。逆にいえばイギリス、アメリカとの精神的共通地盤があつたからこそ、両国に抵抗なく接近できたのだともいえる。

本章では、蘇峰の言説の底辺に流れ、また彼を英米側に心理的に傾ける一助をなしたアメリカ人の影響について考察してみたい。まず明治三十年代を振り返って、彼自身が後年、次のように回想していることに着目したい。⁽⁵⁹⁾

米国人にして予の思想に最も深き印象を与へた者は、前にエマーソンあり、後にルーズベルトあり。エマーソンの思想は、今日より考へて見れば、エマーソンが、東洋の諸学者より得たる思想を、更に蒸溜して、我等に与へたるものであると云ふ事を曉つた。それはエマーソンの書籍を見ても、其事が判知る。云はゞ東洋人たる我等は、東洋の思想を、エマーソンから、頗ち与へられたに過ぎない。ルーズベルトの思想は、思想家としてなく、寧ろ現実の政治家としてであるが、彼の著作は、予に向つて『力の福音』なるものを、徹底的に説教した。予はルーズベルトに依て、新たに其の福音を曉りたる者ではないたゞ彼に依て、予が自覚したる所のものを、裏書きせられたる事である。……然し此の裏書きは、予にとつては、最も有力なる裏書きであつた。予は横井小楠に依て、予の理想を授けられ、其の理想を実行するの方法に就ては、米国セオドル・ルーズベルトに依て、其の之を行ふ手段を、啓発せられ、刺戟せられた

ここで追想するように蘇峰は、ラルフ・W・エマソンとシオドア・ローズヴェルトという二人のアメリカ人から思想上、強い刺激を受けていた。哲学者エマソンと大統領ローズヴェルトという職業、性格の異なるアメリカ人が明治期の蘇峰にインパクトを与えた点については、これまでいくつかの拙稿で論じてきただが、ここでは蘇峰の「日英米同盟論」、西洋、ロシア論に対して彼らがいかなる作用を及ぼしたかという点を探ることにする。

第一に、エマソンの影響を検証してみよう。青年時代の蘇峰はエマソンのエッセイ「自己信頼」（“Self-Reliance”）から大きな示唆を受けた。エマソンは世間の人々や書物といった外部のものに自己を合わせるのでなく、自分自身の内部から湧き出でる直感を大切にしなければいけない、「おのれを信ぜよ」、そうすれば「きっと新しい能力が現れる」として雄雄しい「自立獨行」の人になることを勧めた。⁽⁶⁰⁾ここでエマソンは個人が「自己信頼」を実行するよう促しているが、若き日の蘇峰はこの考えに共鳴するとともに、明治二十年代になると自分だけではなく日本国民の一人一人が己れと祖国を信じ、その結果、日本を活力に溢れる国、狭い島国に安住せず対外的に膨張する帝国、西洋列強に負けない富強国に発展させるよう主張した。⁽⁶¹⁾このようにエマソンの思想からヒントを得て、それを個人から日本という国家にまで拡大、変形、応用させる蘇峰の態度は、明治三十年代の言論にも顕著に表れている。例えば明治三十一年初頭、列強の清国分割を見て国家の興亡を考えさせられたのであろう、次のように述べている。インドのように厭世主義の国民はその国とともに衰退し、ヨーロッパ強国のように樂天主義の国民はその国とともに興隆する。国民が自國に厭世的ないし樂天的であるかどうかによって、その国の運、不運が決まるのだから、日本国民が列強と競争できないと悲観するならば、国運も自ずとそうなってしまう。反対に国民の潜勢力、国富の増殖力、国運の膨脹力を信じるならば、日本の将来もそれに従う。「斯くある可しと信ずるは、斯くある第一の階梯に候。」⁽⁶²⁾こうだと信じればそれは実現に向かうというのである。このように蘇峰

は、自國の潜在能力を信ずる力こそが、西洋の帝国主義に伍し、日本の帝国主義を發展させる必須の要素であると考えた。

エマソンの「自國信頼」を拡大した蘇峰の「自國信頼」は、日本をとりまく國際環境が厳しさを増すに、一層強く念じられるようになる。明治三十六年四月、ロシアの満洲第二次撤兵不履行によって日露関係が緊迫する中で、蘇峰は以下の11つの詩を想起した。まずスコットランドの詩人トマス・キャンベル (Thomas Campbell) の「汝らイングランドの船団」 ("Ye Mariners of England") であり、中でも着目したのはその第111～111〇詩節であった。

Britannia needs no bulwarks,
大英帝国は防壁を必要としない
No towers along the steep;
急峻絶壁の塔を必要としない
Her march is o'er the mountain-waves,
その進軍は山なす波濤を越え
Her home is on the deep.
その故郷は大海原にある

The thunders from her native oak
オーク材の木造船からとどろく轟音
She quells the floods below,
船は押し寄せる水を抑え鎮める
As they roar on the shore,
迫り来る水は岸に向かって吼える
When the stormy winds do blow!
暴風がまことに吹き荒れる

When the battle rages loud and long.
戦いがやかましく長く猛威を振るひ

And the stormy winds do blow.
暴風がまことに吹き荒れる

この勇ましい戦争の歌を蘇峰は「大英は、壘柵を要せず、険岨に聳ゆる堅城を用ひず。彼は山なす波濤の上を進軍す、彼は千尋の海を家とす」と訳して紹介し、イギリスが世界的勢力になつたのは、この詩に表れた「自信

力」のおかげであるといひ、自己信頼から生じる力がいかに国家を隆盛に導くか、その重要性を訴えた。ロシアの満洲占領継続に際して蘇峰が次に想起したのは、アメリカの詩人ロングフェローの詩「われら死せんとする者めみに礼や」("Morituri Salutamus") であり、中でも着目したのはその第一〇〇～一〇五詩節であつた。

Write on your doors the saying wise and old, 君のとびらに賢明な古くからの格言を書け
 "Be bold! be bold!" and everywhere, "Be bold: 「大胆であれ! 大胆であれ!」⁽⁶³⁾におひでも「大胆であれ、
 Be not too bold!" Yet better the excess ただし大胆過るな!」⁽⁶⁴⁾。それでも過るたるはよし
 Than the defect; better the more than less; 及ばぬよりは。少ないより多く方がよい
 Better like Hector in the field to die, 戰場で死なねばならないヘクトールの方がよい
 Than like a perfumed Paris turn and fly. 香水の匂いを漂わせ、寝返り、逃げ失せるパリスよりも

右の詩におひでロングフェローは、ホメロス (Homeric) の叙事詩『イリアス』(Iliad) に登場するトロイアの第一王子ヘクトールと第二王子パリスを引き合ひに出している。兄のヘクトールはトロイア戦争において祖国のため勇敢に戦うが、ギリシアのアキレウスとの一騎打ちに敗れて亡くなる。一方、弟のパリスはスバルタ王メネラオスの妻で絶世の美女ヘレネーと恋に落ち、彼女を連れ去つたためトロイア戦争を引き起すが、戦いの最中、メネラオスを見ると脅えて逃げ出してしまう。⁽⁶⁴⁾ ロングフェローはこの二人を対置しつつ、物怖じしない心の必要を歌つているが、蘇峰は青年時代からロングフェローの詩にしばしば表れる、アメリカ的な前向きで雄雄しい人生態度に魅了されていた。右に引用した詩節を蘇峰は、「大胆なれ、大胆なれ、隨處に大胆なれ。過甚に大胆なる勿れ。然も及ばざるより過きたるは善く、少きより多きを優れりとす」と訳して紹介し、アメリカがイギリスを超えて目覚しい勢いで世界の競争場を駆けるのは、」のような意志と望みがあるからだとして、日本人もアメ

リカ人のように自國を信じるよう主張した。⁽⁶⁵⁾

以上のように蘇峰はエマソンの自己信頼、及びそれに通じるキャンベルやロングフェローの勇敢な詩に励まさ
れながら、ロシアを筆頭とする西洋列強に圧倒されることがないよう、かつ日本の潜在能力と輝かしい未来を信
ずるよう説いたのである。ここで注意を促したい点が一つある。それは彼が一方で日英米同盟論を唱えながらも、
他方でこうした「自國信頼」を強調し、イギリス、アメリカへの依存を強く戒めていることである。エマソンは、
自己を信頼することは他者への模倣や順応を拒否すること、すなわち何らかの形で他人を頼りにしないことだと
考えた。蘇峰はこれを国家レベルにまで拡大し、明治三十五年、日英同盟協約が成立した際、以下のように述べ
ている。世界第一の海軍国イギリスと提携できたのは快心の業だが、それが国民の安心感を助長し、自立心を減
殺させはしまいかと不安に堪えない。「国民的依頼心は、實に賤しむ可きの極たり。」日英同盟の舞台は清国と韓
国にあり、そこでは逆にイギリスが当方を頼みとすることの方が多く、わが国民の責任は増加したのである。ま
たイギリスが同盟を求めたのは、こちらに実力があるからであり、その実力を失えば日本を当てにしないだろう。
「恃む可きは自個の力也」。日英同盟の誕生によつて、逆にわが国民がアングロサクソンの「自から恃むの精神」
から感化を受けて欲しいものだという。彼にとって日英同盟は、ロシアの満洲、韓国進出と門戸閉鎖を阻止する
ため、利用するにこしたことはなかつた。しかしながら、イギリスの力に依存するような考えを起すならば、自
国の潜在能力を振り絞ろうという気持は萎えてしまい、そうなればロシアはもとより同盟国イギリスからも足許
を見られるだろうというわけである。その後、明治三十六年五月よりロシアが満洲だけでなく、韓国西北端、鴨
緑江河口の龍岩浦に軍隊を進駐させ、同地に軍事根拠地を建設した後、蘇峰は「恃む所は、自個の力のみ」との
主張を再びくり返し、イギリス、アメリカとの協力を重視しながらも、両国に依存心を持たないよう国民を戒
めた。⁽⁶⁷⁾

右のようすに蘇峰の日英米同盟論の根底には、イギリス、アメリカと提携はするが、両国に依存はしない、日本はあくまで自主独立の姿勢を堅持すべきであり、それがあつての同盟であるという「自國信頼の精神」が貫かれていた。このスピリットは蘇峰自身が少年期より吸収した福沢諭吉の「独立自尊」、サミュエル・スマイルズ（Samuel Smiles）の「自助（Self-Help）」の精神と通じる部分があつたが、蘇峰自身が「自恃」ないし「自ら恃む」の語句を多用していることから明らかのように、エマソンの自己信頼の概念からもつともヒントを得ている。そうした蘇峰にとって明治三十年のアメリカ旅行は、敬愛するエマソンの故地を「巡礼」する絶好の機会であった。⁽³⁸⁾ エマソンの故宅を訪ねてボストン郊外のコンコードに赴いた彼は、その時の想い出を四年後の明治三十四年、おおむね以下のように語っている。⁽³⁹⁾

明治三十年五月、コンコードを訪ねた際、エマソン学校という小学校を参観した。ちょうど春期試験の最終日であつたため、生徒の作文や朗読などで賑やかだつた。その際、自分は唱歌を聞いて大いに感じたのである。かねてからアメリカの国風を知つていたので、唱歌も平和な調子だらうと考えていたのだが、予想と全く反対に、いずれも勇壮活発な意味の文句を歌つてゐるではないか。それは人の雄心を鼓舞して、万里の波涛を凌ぐ志を起させるような趣があつた。アメリカ人は今でこそ平和、自由を愛し、他方に手を出さないが、十年二十年してこの生徒たちが社会の要部を占めるようになれば、アメリカの氣風は必ず大きく変化し、恐るべき勢力となつて四方に膨脹するだらうと思つたのである。ところが帰路ハワイに立ち寄つてみると、アメリカによるハワイ併合の氣運はすでに熟した勢いで、翌年にはキューバ、フィリピンにまで手を伸ばした。国運が伸展するか退歩するかは、小学校を見ればわかる。個人の膨脹が国家の膨脹をもたらす。したがつて小学校では、生徒の膨脹を励ます教育をしなければいけないのである。

エマソンにちなんで名づけられた小学校において、蘇峰は子供たちが活力にあふれた歌を唱えているのを聞き、

このような教育を受けるアメリカ人は将来、必ず海外へ膨脹するであろうとの予感を得た。エマソン小学校に彼らは、アメリカ人の自己信頼のスピリットを見たのである。

他方、帰国した蘇峰が見る日本人は、自己を信じて元氣激昂としているどころか、江戸時代の封建社会の遺風を引きずり、政府に対する依存心が強く、アメリカ人やイギリス人に較べて萎縮し、一人一人が本来の力を出し切つていらない憾みがあつた。⁽⁷⁰⁾これを憂えた彼は、政府の保護ばかりをあてにする「依頼根性」ほど困るものはないといし、一人前の人間としての教育に必要なのは自己のみを頼りとする「自恃の精神」であるとした。自分を持む精神こそが人の生命であり、そこからその人間を動かす力が湧き出るのであつて、これを発動しないために折角の才能や技量を生かさない者がいるのは残念だというのである。⁽⁷¹⁾明治三十六年七月、東京帝国大学の卒業式が行われたが、この年は帝大をはじめとしていずれの上級学校においても学生は就職難に悩まされた。しかしながら、それはかえつて祝すべきだと蘇峰はいう。青年は苦難にぶつかつてこそ自力で天地を開拓する必要が生じ、自分以外に頼るものはないことを自覚するからだというのである。その際、蘇峰はエマソンの発想に加えて、実業家アンドルー・カーネギーの言葉を引用している。かつてカーネギーは青年にいわく、自分で水面に浮ぶことのできる者に対してもその救助が自力で泳げない者に対して何の救助が必要であろうかと。これは道理にかなつた言葉であるとして、蘇峰はカーネギーの「自力の福音」、自助努力の重要性を強調した。⁽⁷²⁾

）のようには自己信頼、自力独行の精神の必要を説いた。日本人が各自それを持つならば、日本は興隆し、西洋列強に遅れをとらない国になると考えたのである。蘇峰におけるエマソン思想の拡大応用は日英米同盟論から教育、日本の将来像にまで及び、その議論全般を背後から支えていたのである。

第二にローズヴェルトの影響を見てみたい。明治三十四年九月、ウィリアム・マッキンリー（William McKinley）大統領の暗殺にともない、副大統領のローズヴェルトが第二六代大統領に昇格した。蘇峰は当初からこの

新大統領に好もしい感情を抱き、ローズヴェルト氏は「廉幹直諒、其の政務に堪能なると同時に、学識文芸亦た一世⁽⁷³⁾に秀でたる人士」で「達識明決、雄志敢行の人物」、並々のものではない「硬漢」であると高い評価を寄せている。ジョージ・ワシントン（George Washington）、エイブラハム・リンカーン（Abraham Lincoln）を除き、それまでの時期に彼がこれほどの賛辞を寄せた米大統領は他にいなかつた。⁽⁷⁴⁾ それは日米間の友好感情を高めるため意識的になされたものである反面、その主義主張に強い共感を抱いたからでもあつた。

満洲での緊張が高まる明治三十六年になると、ローズヴェルトへの言及が目立つて多くなる。蘇峰はローズヴェルトのどのような意見に惹かれたのであろうか。それは大別して三点に分けられる。①「力行の福音」、②「自國信頼」、③「力の福音」の考え方である。まず、①「力行の福音」について見てみよう。明治三十五年十二月、ローズヴェルトが一般教書を発表するが、その中で蘇峰が注目したのは左記の部分である。⁽⁷⁵⁾

我々はひどく失敗するか、ひどく成功するかのどちらかもしれない。しかし大失敗であろうと大成功であろうと、そこに努力を避けることはできない。……

……我々の信条は弱虫と臆病者のそれではない。それは希望と勝利を収める努力の福音である。我々は眼前に横たわる戦いにしりぞみしない。

蘇峰はここでローズヴェルトのいう「努力（endeavor）」に「力行」の語をあてはめ、「吾等の信条は、臆病者、意氣地なしの信条にあらず。吾等の福音は、希望と、勝利を期する力行の福音なり。吾等は大失敗か、然らずんば大成功を遂ぐ可し。大失敗乎、大成功乎、其の結果は、予知する能はざるも、吾等は大力行を避くる能はず」⁽⁷⁶⁾ と訳して紹介した。ローズヴェルトは希望を胸に奮闘努力することに人生の高い価値を置き、アメリカ国民にもそれを期待した。またそれは自己の力を信じ、セルフメイドの人間として成功を目指すアメリカ社会の価値観と

一致していた。蘇峰はローズヴェルトの姿勢に強く共鳴し、一般教書としてこれは「頗る破格の調子」であるとした上で、日本の「引き込み思案の老若政治家達」はこの一節を熟読すべきだと苦言を呈した。⁽⁷⁷⁾ このようにローズヴェルトの雄雄しい前向きの態度に刺激された蘇峰はその後、自ら「力行論」なる文章を書き、読者を叱咤激励している。その一節を引用しよう。⁽⁷⁸⁾

夫れ人生は力行のみ、吾人の能力も、此れに頼りて発達し、吾人の幸福も、此れが為めに到達す。苟も力行なからん乎、人生は憐む可き、安逸を貪ぼる軟骨動物の集合たるのみ。而して力行は、即ち戦闘なりと知らずや。

ひるがえつてそれまでの蘇峰の人生を見るならば、それは権威や大組織に頼らず、自己を信じて奮闘努力する生活そのものであつた。彼の内面にもともとあつた力行の概念は、ローズヴェルトによつてより明確に自覚され、その心を熱く燃やすことになつたのである。アメリカ人のもつ活力に満ちた人生態度を、蘇峰は共感と感激をもつて受け入れたのであつた。

蘇峰が惹かれたローズヴェルトの考え方として次に、②「自國信頼」を見たい。明治三十六年四月、満洲を制圧し続けるロシアに対して蘇峰は、これはいかにしても座視できない、自分は平和を希望するが、そのためには一時の平和を犠牲にする場合がなきにしもあらずだとして、戦争を予期するようになる。さらに五月、ロシアが韓国の龍岩浦に進出すると切歎扼腕して、わが国民がこの状態をいつまでも辛抱すると思うべきではない、いかなる傍観者でも呑氣でいられないが、ましてや「愛国の熱血、血管中に沸くの士」においてをや、と憤る。⁽⁷⁹⁾ 八月、日本政府はロシアに対して両国の特殊権益を画定するための交渉を提案し、以後、翌三十七年一月に至るまでの半年弱、両政府間に満洲と韓国の領土保全、商工業上の機会均等をめぐつて協定案が交換され、折衝が続けられた。蘇峰は妥協点が見つかることを望んだが、ロシアの目標は満洲の永久占領にあると見通し、交渉が決裂すれ

ば、戦いも辞さない覚悟を固めていく。⁽⁸⁰⁾

そうした中で彼を勇気づけたのが、ローズヴェルトの言葉であった。明治三十六年九月、蘇峰は、国家隆盛のためには国民が自国の運命を信ずることが肝要であるとした上で、ローズヴェルトがある演説において述べた次のような文言に着目した。

わが国の最も偉大な政治家たちはいつでも、「國家を信じた」人々——わが国民の力が世界の諸国民の中で最も強大なものとなるまで広がるであろうという信念をもつた人々であった。⁽⁸¹⁾

これは明治三十四年、ローズヴェルトがコロラド州誕生二十五周年記念の祝典で行つたスピーチの一部で、ローズヴェルトの著作の一つである『奮闘的生活』(*The Strenuous Life*)に全文が収録されている。この書を蘇峰は入念に読み込んでいた。お茶の水図書館成蹊堂文庫に保存された蘇峰旧蔵の『奮闘的生活』を繙くと多くの書き入れが認められるが、右の引用箇所は青鉛筆で鉤カツコが括られた上、赤鉛筆で三重のサイドラインが付されている。同書中にこれほど念入りに書き込みがなされた部分は他になく、彼の受けた感銘のほどがうかがえる。この一節を蘇峰は自らの心に留めるだけでなく、次のように訳して読者に紹介した。「米国最大の経世家は、皆な深く国民を信じたる人物なりき。我国の人民〔アメリカ国民〕が、世界諸国民の中に於て、最大最強の国民となるまで、発達し膨脹すべき実力を有する事を信じたる人物なりき。」⁽⁸²⁾このようにローズヴェルトの言葉を訳出し、範として示した蘇峰は、もしアメリカ人とは逆に、日本人が自國をつまらないものとみなせばどうなるか、国民の第一の義務は「自国の運命を信ずること」でなければならないと戒めている。⁽⁸³⁾

ローズヴェルトの『奮闘的生活』には、その他にも自國信頼の考え方が頻繁に表れる。例えば、南北戦争の際、アメリカでは「ヒステリックな少数派」の絶対的平和主義者が戦争を悪として糾弾した。しかし一度決定した政

策を執拗に押し進められない国は、偉大さを失うことになるとローズヴェルトはいう。「実際には、この国「アメリカ」は国民が全体的にぐらつかず動じなかつたために救われた〔傍線は蘇峰が書き込んだアンダーラインを再現したもの、以下同様〕」、「南北戦争時、平和を確保する唯一の方法は、そのために戦うことであり、平和を勝ち取る前に戦いをやめていたら、それは人道に対する罪となつていただろう。」このようにローズヴェルトは、北軍側の戦争にかけた意志こそが後日の勝利と発展をもたらしたとした。⁽⁸⁵⁾ ロシアとの戦いを想定する蘇峰は、南北戦争時のアメリカの体験を自国の運命に重ね合わせて真剣に読んだことであろう。さらにローズヴェルトは以下のようについて、「他の国々と親善、好意的関係があつたとしても、それは国民的自己信頼〔national self-reliance〕に取つて代わることはできない。……我々は自分の運命を自分の力で解決しなければならない」という。⁽⁸⁶⁾ この個所は、たとえ英米と友好関係にあつてもそれに依存してはならないという蘇峰の考え方と見事に一致する。ローズヴェルトがいう「国民的自己信頼 national self-reliance」とは、まさに蘇峰のイメージする「自国信頼」に他ならない。

ローズヴェルトはさうにいう。「わが「アメリカ」国民は空であつた大陸を自治州で満たし、一つの国家に結合させたが、人類の歴史上、これに類するものはない。」不屈の精神、鉄の忍耐力をもつてロッキー山脈や太平洋岸に向かつた開拓者とそれに続く人々の記録は、「我々が大変誇りにするものである。それは大いに挑み、大いに成し遂げた人々の記録である。ヴァイキングよりももつと幅広く、危険な放浪の記録である。未開人と野性に対するやむことのない戦いと、⁽⁸⁷⁾勝利に次ぐ勝利を示した終りなき武勲の記録である。西洋の成功はわが人種の歴史上、大なる叙事詩的偉業である。」⁽⁸⁸⁾このようにローズヴェルトは自国の歴史を称えて胸を張つたが、蘇峰はこれにヒントを得て、日本にも過去に英雄大人がいたことを教えることによつて、国民の「自信力」を引き出すべきだと提案している。⁽⁸⁸⁾蘇峰はエマソンから示唆を得ただけでなく、ローズヴェルトに自国信頼の概念そのものを

見出し、ロシアの重圧を感じる中で教訓と励ましを得たのである。

さらに蘇峰が惹かれたローズヴェルトの考え方として、③「力の福音」がある。日本がロシアに交渉を持ちかけた明治三十六年八月、蘇峰は次のように述べている。道徳の君子が失敗するのはなぜか、仁義にばかり頼り「個の力に依頼する」ことを解しないからである。このように切り出した彼は、つづいて左記のようなローズヴェルトの言葉を引き合いに出す。⁽⁸⁹⁾

吾等は善ならざるべからざるのみならず、また強からざるべからず。吾等に高き精神なからべからざるのみならず、また勇敢なる氣力なからべからず。吾等は高く思想せざるべからず。而してまた強く力行せざるべからず。聖書には鳩の如く温しくあるべしとのみ書かれずして、また蛇の如く賢からざるべからずと書かれたり。……力と高き決心との後援なき温順柔和は、殆んど善を成すに思えず。

ここでローズヴェルトは聖書の一節を紹介している。新約聖書「マタイによる福音書」一〇、五一六の中でイエス・キリストは教えを広め、人々を救うために十二使徒を派遣するが、その際、使徒たちが受ける迫害を予見して次のように述べた。私はあなた方を遣わす、それは狼の群れに羊を送り込むようなものだ、だから「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」⁽⁹⁰⁾。これによるとイエスは、信仰に心を開いて鳩のように平和で素直な心をもつと同時に、迫害しようと待ち構える狼のような人間には警戒を絶やさず、蛇のように賢くありなさいとする。ローズヴェルトはこの一節にちなんで、高い精神を実行するには単に温和であるだけではなく、決心と力が必要なのだという。それがあつてはじめて善をなし得るというのである。それに対して蘇峰は「是れ殆んど吾人の言はんと欲する所を、謂ひ尽したるもの」⁽⁹¹⁾である、道義仁義は自動的に力を発揮するのではない、人間の力と化合してはじめて強く大きくなるのだとした。さかのぼって明治二十八年、よく知られるように三国干渉の衝

擧によって「力の福音」の信奉者になり、力があつてこそ道理が実現するとの考えを心に刻んでいた蘇峰は、ローズヴェルトの言葉に我が意を得たり、異国に知己を得たとの思いを感じたのである。

明治三十六年十月、蘇峰は、平和の手段が尽ければ戦争に訴えるのも辞さないとの決意をそれまで以上に強く明確に打ち出すようになる。「戦雲は日に増し、時に増し、……極東の天に重なり来り候」と緊張する彼は、頼山陽の詩「蒙古来」を思い浮かべ、いよいよ国難が迫るとの感を深めた。⁽⁹²⁾ その頃、ローズヴェルトが再び南北戦争を振り返り、当時のアメリカ人が平和のために立ち上がって血と苦しみの代償を払つたからこそ、今日の自分たちがあるというスピーチを行うと、蘇峰はこれに深い感銘を受けた。「斯の快人にして、斯の快語あり」、アメリカの勃々たる元気が固まつて一個のローズヴェルトとなり、その口を借りてこのような言葉を発せしめたのだ。今後も氏は、自国民が一時の安逸を貪るような姑息な態度をとることは望まないだろう。ひるがえつて、これからわが国にいかなる事件が出来するにせよ、それは無上の機会である。我々は自ら好んで衝突はしないが、彼「ロシア」が迫り来るにおいては辟易すべきではない。このように蘇峰は述べ、自分自身と読者の勇気を奮い立たせた。⁽⁹³⁾

右のようにローズヴェルトから鼓舞される蘇峰は、十月末に日本政府がロシアに提出した第一次確定修正案が満韓交換論の立場に接近したものであることがわかると、それを「姑息案」と呼び、桂内閣がこのような「弱音」を吐くなれば、わが国民はロシアに先んじて同内閣に取り掛からねばならないと難した。⁽⁹⁴⁾ この日本の修正案に対して十二月、ロシアが修正対案を提出した後、蘇峰は「我が帝国は、餘りに歯痒き程、隠忍したり。最早世界は、我が帝国の平和的誠意を、疑ふものなかる可く候。……男らしく御相手に、罷り成るの外、他に道なかる可し」としてロシアとの戦争を最終決断することになるのである。⁽⁹⁵⁾

以上、蘇峰におけるエマソンとローズヴェルトの影響を検証した。明治三十年代を通じて蘇峰は、エマソンの

自己信頼の精神を応用拡大した自國信頼の精神を謳うことによって、西洋に遅れをとらない國家の隆盛を希求し、日英米同盟といつてもイギリス、アメリカに依存する事がないよう念を押した。またロシアの満洲支配に際して、ローズヴェルトの①力行の福音、②自國信頼、③力の福音に共感し、それらに勇氣づけられながら、ロシアとの戦いを決意し、国民の奮起を促した。

右から明らかのように、ロシアへの抵抗、アメリカとの協調を求める蘇峰の言動は、その裏面においてエマソン、ローズヴェルトの二人のアメリカ人から触発されたスピリットによつて支えられていた。要するに彼は外交上、アメリカに接近しようとしただけでなく、思考や価値観の面でも同国に近づいていたのである。こうした精神面での共通地盤があつたからこそ、両国の側へとより一層傾いたのであつて、もし打算のみで動いているのであれば、アメリカへの傾斜度はもう少し緩やかなものとなつていたに違いない。

またさらに踏み込んでいえば、蘇峰は一面においてアメリカが好きであつた。エマソン、ローズヴェルト、あるいはハリス牧師やバック公使を通じて見た、自主独立心が強く、バイタリティにあふれ、しかも繁栄と腐敗の交錯したいわゆる「金びか時代」「鍍金時代」(The Gilded Age)になつたとはい、ピューリタン的な真面目さと清浄な精神を残しているアメリカ（正確にはアメリカのイメージ）を愛していただのである。後年の回想を見ると、彼は一生「反アメリカ」で過してきただと自らを振り返つてゐる。⁽⁹⁶⁾確かに自國の誇りを重んじ、ペリーによる開国やアメリカ人の人種偏見、自國中心性を憤る点で、その生涯は反米で貫かれていたといつてよい。しかしながら蘇峰は他の多くの日本人と同様に、アメリカに対して愛憎が並存したアンビバレンツな心理をもつており、ある面においてアメリカ嫌いであるとともに、また別の面では本章で見るようアメリカ愛好者でもあつた。前章末尾で引用したように、彼は外交問題に感情は無用であるとしたが、だからといって彼自身が感情から完全に自由であつたわけではない。蘇峰はアメリカに共感し、同国が好きであり、そうした感情に後押しされながら、アメ

り力に歩み寄つたという側面があつたのではないだろうか。

- (1) 拙稿「徳富蘇峰のアメリカ旅行」『法学研究』七七卷六号、平成十六年六月。
- (2) 蘇峰の経歴については、主に和田守編『年譜』『明治文学全集34 徳富蘇峰集』（筑摩書房、昭和四十九年）所収を参照した。
- (3) この点については、有山輝雄『徳富蘇峰と国民新聞』（吉川弘文館、平成四年）第三章「明治三十年代の『国民新聞』」が詳細に検証している。それによると、蘇峰が欧米旅行から帰国した明治三十年から翌三十一年にかけて、『国民新聞』は発行部数を約三分の一減少させ、深刻な経営難に陥つたが、三十四年六月、第一次桂内閣の成立とともにこれに協力したのを契機として部数を拡大していく。また桂への支持については、柴崎力栄『伊藤博文のロシア行と歴史家徳富蘇峰』『日本歴史』一九八六年十一月号、通巻四六二号、七〇頁によると、蘇峰は明治三十四年八月中下旬、旧知の松方正義の紹介で桂に会見して内閣支援を約し、以後漸次接近して、三十五年一月の日英同盟成立を一つの潮合として桂と一致することになる。
- (4) 徳富猪一郎『蘇峰自伝』（中央公論社、昭和十一年十一月第五〇版）三八三頁。
- (5) 最近出版された『徳富蘇峰 終戦後日記IV—「頑蘇夢物語」完結篇』（講談社、二〇〇七年八月）一八〇、一八四頁においても蘇峰は、内務省勅任参事官として内閣に加わつたことで「およそ当時の日本人中予程悪評的となつた者はあるまいと思う程に、衆難群謗の標的となつた」、「予の言論は、全く権威を失い、殆ど誰れも相手とする者はなかつた。予の信用は、全く地に堕ちていた」と回想している。このとき蘇峰が新聞ジャーナリズムによつてどのような非難を受けたかについては、杉原志啓『蘇峰『変節』問題一考』岩崎達郎編『徳富蘇峰生誕百四十年記念論集近代日本と徳富兄弟』（財団法人蘇峰会、平成十五年）所収を参照のこと。
- (6) 『大阪朝日新聞』明治三十四年九月十九日第四面、『日本人』第一四八号、明治三十四年十月五日、四六頁、『復刻版 横浜毎日新聞』（原題『毎日新聞』）第三五回配本（第一二九卷～第一二三卷）（不二出版、一九九八年）明治三十四年九月二十日第一面、一二七頁、『読売新聞』明治三十四年九月三十日第一面、『報知新聞』明治三十四年九月十六日第一面、『中央新聞』明治三十四年九月二十五日第四面、『東京日日新聞』明治三十四年九月十九日第七面、『京

華日報』明治三十四年九月十九日第一面。徳富猪一郎、国民叢書第二十冊『人物偶評』は明治三十四年九月、民友社から発行された。第一次桂内閣の誕生（同年六月）から約三ヵ月後のことである。一方、蘇峰の執筆による「帝国主義の真意」『国民新聞』明治三十二年三月二十四日社説は『日本』の注目するところとなり、その批判を受けたが、これも論壇における蘇峰の存在感の一端を示している。「帝国主義の解」『日本』明治三十二年三月二十五日社説、『日本』第三二巻（ゆまに書房、一九八九年）所収、五四三頁。

(7) 中央アジアの英露対立への蘇峰の関心については、拙稿「徳富蘇峰とアメリカン・デモクラシー—自由民権運動後半期を中心にして」『法学研究』七四巻七号、平成十三年六月、六七—六八頁。蘇峰の日英同盟工作については、杉井六郎『徳富蘇峰の研究』（法政大学出版局、一九七七年）第六章「蘇峰の歐米旅行」。イギリスに向かう途中、アジアの英領植民地で彼が日英同盟工作を開始していた点は、拙稿「徳富蘇峰のアメリカ旅行」四一頁。

(8) 本稿に関連する主な学術論文としては、柴崎力栄「日清戦争を契機とする徳富蘇峰の転換について—海軍力と国際情報への着目—」『大阪工業大学紀要 人文社会篇』三六巻一号、一九九一年十月などがある。柴崎氏の論考は、日清戦争中から蘇峰が貿易と殖民活動を背後から支える海軍力の拡充を主唱していたこと、また『国民之友』明治二十九年十二月にアルフレッド・T・マハンの紹介記事が初めて登場し、その後三十年一月から二月にかけて同誌にマハンに関する批評や広告が頻出するようになつたことを指摘している。明治二十年代末から三十年代初頭にかけて蘇峰とその雑誌が海軍力に着目した点を俎上に乗せた柴崎氏の視角は重要である。本稿では氏が言及できなかつた時期まで視野を延長し、蘇峰による海軍力とマハンへの着目というテーマをさらに発展させてみたい。その他に早川喜代次『徳富蘇峰』（蘇峰会、昭和五十四年第二版）、John D. Pierson, *Tokutomi Sohō, 1863-1957: A Journalist for Modern Japan* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1980) が苏峰を初めとする蘇峰の全生涯を追った数々の伝記、研究も、明治三十年代の彼に言及しており、いずれも示唆に富んだ貴重な労作である。ただし本稿のように蘇峰のアメリカ観に焦点を当て、しかも明治三十年代に限定して集中的に分析を加えた論稿は、管見の及ぶ限りでは見出しができなかつた。

(9) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十一年二月八日、四月二、七、九、十三日、五月七日、三十二年四月三十日。蘇峰自身は「バランスサー」の語を用いていないが、「権衡を保つ」との表現によりバランス・オブ・パワー

の考え方を明確に示している。なお門外漢が蘇峰のペニームであり、「東京だより」がその執筆によるものであることは、後藤是山「『東京だより』回顧」財団法人蘇峰会編『想い出の蘇峰先生』(蘇峰会、昭和四十四年)所収、一三六一—一四二頁を参照のこと。

- (10) 拙稿「徳富蘇峰のアメリカ旅行」三九、四一、四八頁、杉井『徳富蘇峰の研究』第六章「蘇峰の欧米旅行」
 (11) 拙稿「徳富蘇峰の大日本膨脹論とアメリカ—明治二十年代を中心に—」『同志社アメリカ研究』第四号、二〇〇五年三月、四八頁。

- (12) 「極東に於ける日英米」『国民新聞』明治三十一年二月二十三日社説。無署名であるが、文言、文体から蘇峰執筆と判断した。蘇峰自身、「日英米三国同盟の論」は昨秋(明治三十年秋)以来、わが社がくり返し論じてきた問題であると強調し(門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十一年五月二十日、八月七日)、別の記事でも「日、英、米の三国同盟」の語を多用しながら同様の主張を行つており、三国同盟論は右の社説に限らない。例えば、門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十一年四月二十一日など。

なお当時、日英米同盟論を唱えたのは蘇峰だけではなかった。北岡伸一「初期『太陽』に見るアメリカ像—日清日露戦間期日本外交に関する一考察」鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』(思文閣出版、二〇〇一年)所収、二三九一—二四〇頁によると、進歩党領袖、肥塚龍は『太陽』明治三十一年五月二十日号で「日本は宜しく英米二国と相結んで東洋平和の護持者たる任務を尽すの覚悟を為すべし」と述べ、以後、そうした英米との提携、日英米同盟論は同誌において強く提倡されるようになり、中でも「平和主義の三国同盟」(三十一年六月五日号)は、清国との分割を目指す露仏独の提携に対し同國の保全を目指す日英米の提携を主張した。このような見方は蘇峰のそれと似ているが、彼と『国民新聞』の方が『太陽』よりも日英米同盟論を唱え始めた時期は早かった。

- (13) 第二次世界大戦後、蘇峰は次のように述べている。「予は出来得べくんば、同盟国として英國を、準同盟国として米国を友邦とし、三国協和に依て、東亜及び太平洋の問題を処理せん事を期待した。」日本の最も恐るべき敵はソ連であつたから、最後まで米英と協調したいと考えたのである。しかしながら日露戦争後、日本という「出る杭」は米英によって叩かれ、最後は日米通商航海条約廃棄、ABC-D包囲陣、対日石油全面禁輸、在米日本資産凍結によって真綿で首を絞められるごとき状態に至つたため、この上は行く所まで行くしかないと諦めざるを得なくなつたとい

う。『蘇峰翁自述』本文、第三回第一一〇一二節、昭和二十年十一月二十九日午後口述部分、財團法人徳富蘇峰記念塙崎財團・徳富蘇峰記念館（以下、二宮・蘇峰記念館と略す）所蔵。この文献については、拙稿「敗戦後の徳富蘇峰とアメリカ——一九四五——一九五七年——」『法学研究』八〇巻二号、平成十九年二月、五〇一五二、八七、八二一八三頁を参照のこと。

また蘇峰は別の個所で以下のようにも述べている。本来、英米はシナを寵児としたが、日清戦争後、日本という馬に乗り換えた。ところが「日露戦争以後」日本の馬が余りに走るため、薄気味悪くなつてこれを疎外し、シナという馬に改めて賭けた。アングロサクソンが日英同盟、日米提携の線に沿つて日本を友邦とし、東アジアの秩序を日本に依頼するという観大な政策をとつたならば、日米戦争や戦後のソ連共産主義の拡大はあり得なかつたというのである。「昭和廿四年八月十五日の感想一片」昭和二十四年八月十二日、二四一二六、三一一三二、四三頁、山中湖文学の森・徳富蘇峰館所蔵。こうした蘇峰の国際政治史観は今日の日本やアメリカにしばしば見られる歴史観とは異なるものであるが、それだからこそ検討する余地があるのでないだろうか。

(14) 「一種の日清同盟論」『国民新聞』明治三十一年一月十一日社説。近衛は『太陽』明治三十一年一月一日号に「人種同盟 附支那問題研究の必要」を発表し、清国との「同人種同盟」を作ることに言及した。しかし『国民新聞』から批判された後は、自分を「日清攻守同盟論者」と見ることは誤りであると釈明し、国家と国民の名に値する実体のない清国と同盟して歐州諸国の疑惑を受けるまでの勇気を自分は持たないと明言するようになった。翟新『東亜同盟文会と中国 近代日本における対外理念とその実践』（慶應義塾大学出版会、二〇〇一年）六、一三八頁。近衛の日清同盟政策については、衛藤瀧吉監修、李廷江編『近衛篤麿と清末要人 近衛篤麿宛來簡集成』（原書房、二〇〇四年）六頁にその要点がまとめられている。

(15) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十一年四月十九日、三十二年八月十日、八月十一日。「人種問題と国家政策」『国民新聞』明治三十二年八月十一日社説（同日の「東京だより」が「社説御参考あれ」としている所から、これが蘇峰の執筆によるもの、または少なくともその意に合致したものであることがわかる）。その他に、門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十五年六月十一日、十二月二十三日、三十七年一月九日。なお黄禍論と日本外交の問題については松村正義氏の優れた研究が知られるが、近年では飯倉章氏の一連の論考とその著書『イエロー・ペリー

ルの神話—帝国日本と「黄禍」の逆説』(彩流社、1100四年)が参考となる。

(16) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十九年七月三日、八月二十四日、二月十六日。

(17) Ian Nish, "Origins of the Anglo-Japanese Alliance: In the shadow of the Dreibund", in *The Anglo-Japanese Alliance, 1902-1922*, ed. Phillips Payson O'Brien (London and New York: Routledge Curson, 2004), 11-13. カーボン書簡は明治三十年十一月十九日に書かれ、スペンサー演説は三十一年五月十一日に行われた。

(18) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十一年五月二十日、三十二年一月六日。蘇峰がチエンバーンの発言を知る主な情報源の一例は、ロハムン『タイムズ』(Times)であった。ちなみに、Nish, "Origins of the Anglo-Japanese Alliance," 12によれば、チエンバーンはソールズベリー首相宛書簡の中で、日本人は価値ある同盟者(Allies)になるかやしない、同盟条約が望ましいとは思わないが、英日間の了解一致(understanding)が実際的、実用的な段階にまで達するのを望んでいたとしたが、実際には日本よりもドイツやアメリカとの関係により熱心であり、また同盟といつても軍事同盟までは考えていなかつたようであるところ。

(19) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十一年八月十一日。蘇峰はアメリカ滞在中の増島六一郎から手紙を通じて同国世論の動向を知らされた。二宮・蘇峰記念館には増島の蘇峰宛書簡八通が保管されているが、その中に該当する書状は見出せない。

(20) 蘇峰生「日英同盟の国民的性格に及ぼす影響如何」『国民新聞』明治三十五年二月十六日、門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十五年二月十三、二十六日。

(21) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十五年三月十三日、二月十三日。『インディペンデント』社説の要旨は「両島帝国の同盟」『国民新聞』明治三十五年三月十三日。

(22) 以下、記念碑建設の過程と詳細については、主に澤田半之助「米友協会常任幹事」編集、発行『米友協会会史』(米友協会、明治四十四年六月)の「第二期(明治卅三年十一月より同卅六年未に至る)」二四一—四三頁を参照した。国立国会図書館所蔵の同書を使用したが、これは発行者遺族所有の原本をコピー、製本したもので、表紙見返しの右頁に「覆刻版 2006年」と記したステッカー、左頁に復刻の主意が活字印刷された紙が貼られている。復刻元は未記載のままである。その他に、「ペルリ上陸紀年碑除幕式」『国民新聞』明治三十四年七月十六日。また石井昭『ふ

るさと横須賀 上一幕末から戦後まで』（神奈川新聞社、昭和六十二年）七五一七八頁も記念碑建立について記しており参考になる。

(23) 太平洋基地司令長官といつても、明治三十年当時のアジア太平洋における米海軍は弱体であった。アジア基地（Asiatic Station）のわずかな艦船は清国、日本、韓国の間を巡回し、太平洋基地（Pacific Station）の艦船は北米、南米の海岸線と西はハワイ、サモアまでを巡航した。どちらの基地も司令長官、旗艦を置くものの、強敵と戦い得る艦隊として組織されたわけではなかった。しかし明治三十年から四十二年までの十二年間にアメリカの海軍力は急成長する。William Reynolds Braisted, *The United States Navy in the Pacific, 1897-1909* (Austin and London: University of Texas Press, 1977), 4.

(24) リリード建碑事業を主宰した米友協会について説明しておきたい。『米友協会会史』によると、同協会は明治三十一年十二月に創立され、当初の目的は「米国に遊学若くは在留したる日本人相会し、交誼を厚ふし、相互の便益を計る」ことであった。発足当時のメンバーには珍田捨己、小松綾、米山梅吉などがおり、その後会員が増加した結果、三十三年九月に金子堅太郎が会長に就任し、規約改正によって組織化が進んだ。翌十月、ピアズリーの来日によつて米友協会の活動は本格化し、記念碑完成後には、単にアメリカ留学経験者の交流にとどまらず、「日米両国ノ好誼ヲ鞏固」にすることを目的に掲げ、来日したアメリカの外交官、実業人、ジャーナリストなど要人の歓迎会を行つて日本親善に努めた。記念碑建立の際、蘇峰は直接関与しなかつたが、明治四十一年七月には鳩山和夫、珍田捨己、大倉喜八郎、团琢磨、小村寿太郎、西園寺公望らとともに同協会の評議員となり、遅くとも四十四年六月の時点でも評議員のままであった。その間、蘇峰は明治四十一年十月、アメリカ大西洋艦隊、いわゆるグレイト・ホワイト・フリート来航に際して歓迎委員を嘱託され、乗組士官を歓迎するため芝公園紅葉館で開かれた晩餐会に出席し、その他にも、アメリカ連合通信社（AP: The Associated Press）総支配人メルヴィル・M・ストーン（Melville Elijah Stone）の招待会（四十三年三月）に参加してゐる。

(25) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十三年十一月九日。

(26) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十三年十一月二十七日。

(27) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十四年六月二十日。

(28) 「日米親交の表彰」『国民新聞』明治三十四年七月七日社説。無署名であるが、文言、文体から蘇峰執筆と判断した。

(29) 蘇峯生「日曜の快遊」『国民新聞』明治三十四年七月十六日。その他に『米友協会会史』を参照した。

(30) 「外国対体論」(明治十四年一月上旬推定)花立三郎、杉井六郎、和田守編『同志社大江義塾 德富蘇峰資料集』

(三一書房、一九七八年)所収、一三七頁。実際に時代が下つて日米戦争末期、横須賀市の翼賛壮年団を中心となり、昭和十九年十二月八日を期して碑を粉碎して道路に敷こうという運動が起つた。翌二十年二月、神奈川県知事の許可を受けて碑は撤去され、その跡に「護国精神振起之碑」の木柱が建てられたが、皮肉なことに、これは蘇峰の命名によるものであつた。ところが半年後に終戦となり、粉碎されずに残つていた碑は十一月に復元された。以後、この碑の前で毎年七月に横須賀市がペリー上陸を記念する式典を開催している。石井『ふるさと横須賀上』七八頁。

(31) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十四年三月九日、四月二日。

(32) 松村正義「日露戦争と金子堅太郎—広報外交の研究—」(新有堂、昭和六十二年増補改訂版)、同『ボーツマスへの道 黄禍論とヨーロッパの末松謙澄』(原書房、一九八七年)。また松村氏近年の論考として「広報外交における日露の闘争」日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』(成文社、二〇〇五年)所収など。

(33) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十二年九月八日、十二月二十九日、三十三年一月五日、六月二十六日、七月十八日、八月十一日(『スペクティア』、ニューヨーク『ヘラルド』双方に言及)、十二月五日、三十四年四月五日、三十五年四月一日、三十六年九月十日。黄禍論に接することに蘇峰は「我国は人種に於ても、宗教に於ても、歐米列強の眼中よりすれば、全くの異邦人也。即ち自然に不利益なる、位地に立つもの也」との孤立感を味わつた。それだからこそなお一層、国際世論を敵としてはならないと考えたのである。門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十六年七月一日。同時に彼は、黄禍論に対し事なきれの態度をとらず、人種や宗教の異同から東西を隔てるべきでない、「我が天空海濶の宏量を以て、彼等の偏僻心を、消滅せしめんことを期す可きのみ」という、後の彼の東西文明調和論、あるいは白闇打破論へとつながる決意を固めていった。門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十三年六月二十六日、三十五年四月一日。日露戦争期における蘇峰の東西文明調和論については、神谷昌史『東西文明調和論』の三つの型一大限重信・徳富蘇峰・浮田和民』『大東法政論集』第九号、二〇〇一年三月が参考となる。

- なお蘇峰が反日黄禍論を唱える代表例としてあげた『スペクティター』であるが、同誌は当時イギリスの主要週刊誌の一つであり、長らくロシアとの親善を唱えてきたため、日英同盟がロシアとの関係を損ない、海外での負担を増やすのではないかと恐れ、『マンスリー・レヴュー』（*Monthly Review*）とともに同盟に反対した。ただしそうしたメディアはイギリスでは少数派であった。Ian H. Nish, *The Anglo-Japanese Alliance: The Diplomacy of Two Island Empires 1894-1907* (London and Dover, NH: The Athlone Press, 2nd Edition, 1985), 226.
- (34) オーストラリア、カナダ、アメリカでのアジア系移民、とくに日本移民排斥を嘆いたものとして、門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十二年四月二十二日、三十三年八月十一日、三十四年十月二十九日、三十五年三月八日、五月十七日。例えば蘇峰は次のように記している。太平洋沿岸の米国人がややもすれば我国の労働者その他に対しても好意を表さないような形跡があるのは、吾人が日米親交上、頗る遺憾とする所である。門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十五年五月三十一日。さらに蘇峰執筆と考えられるコラムは次のようにも述べている。吾人は欧米人士中のある者が、世界は白皙人種のために造られたかのように誤想し、人道とは白皙人種相互間の道で、異人種、異宗教の間にはこれを用いるに及ばない、また用いてはならないと迷思する者が少くないのを嘆じめるを得ない。「東西の觸着」『国民新聞』明治三十四年四月三日。
- (35) 明治三十四年六月四日付、七月十九日付、曾禰荒助外相宛高平小五郎公使電報『建像及建碑關係雑件』外務省外交史料館所蔵。
- (36) 明治三十七年二月、日露戦争が始まると、蘇峰は桂首相から次の三点を依頼された。①言論を通じて挙国一致の実をあげる、②第三国に日本の立場を諒解させる、③外国の使臣や特派記者を操縦する。早川『徳富蘇峰』一七二頁。松村正義氏の研究が明らかにするように金子堅太郎はアメリカ、末松謙澄はイギリスで広報外交に従事したが、蘇峰は国内で日本国民、在日外国人とその要人（とくに英米人）に対して世論工作を行つたわけである。この役割は、日英米同盟工作を進めてきた彼にとって適任であったといえよう。
- (37) ロングフェローは門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十二年十一月五日、モースは「東京だより」明治三十二年十月五日、三十四年一月九日。カーネギーについては「剛健真率、快活、方正な紳士」として尊敬し、徒手空拳から巨額の財産を築いた「独立力行」の人生態度、さらにその財産を様々な社会事業に寄付、還元したその「公共

心」は「実業家の手本」であるとしている。門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十一年十二月十日、三十三年一月十九日、二月九日、三十四年五月二十三日、三十五年三月二十八日。欧米旅行で知り合ったチャーレズ・E・ノートン (Charles Eliot Norton) は「東京だより」明治三十一年二月五日、ウェイリアム・J・スタイルマン (William James Stillman) は「東京だより」明治三十二年五月二十五日、三十三年八月三日、九月五日、三十四年七月三日。

- (38) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十一年六月二十三日。ハリスについては、拙著『近代日本人のアメリカ観 日露戦争以後を中心』(慶應義塾大学出版会、一九九九年) 一五一六、六〇一六、六九頁、拙稿「徳富蘇峰と四人のアメリカ人—その親交と蘇峰に与えた影響—」『尚美学園大学総合政策論集』創刊号、二〇〇四年十二月もあわせて参照されたい。
- (39) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十一年六月二十三日。
- (40) 同右。
- (41) 門外漢「東京だより」、無署名記事「ハリス会」、どちらも『国民新聞』明治三十四年六月十一日。
- (42) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十七年一月二十七日。古い文体を幾分新しいものに改めて引用した(例えば「吾等」を「私たち」にするなど)。二宮・蘇峰記念館にはハリス書簡が十二通保管されているが、この手紙は所蔵されていない。
- (43) 同右。
- (44) 註(13)で指摘したように、蘇峰はイギリスを同盟国、アメリカを準同盟国というべき友邦にしたいと考えていた。
- (45) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十五年十二月九日、『蘇峰翁自述』本文、第二回第八節、昭和二十年十一月二十九日午前口述部分。
- (46) A. E. Buck to Tokutomi, 28 August 1897. 二宮・蘇峰記念館所蔵。バックの手紙は蘇峰を喜ばせたであろうと推察される。彼の就任は強い非難にさらされ、それを喜ぶ者、祝意を表する者はいなかつたという。そうした中でバックが祝辞を送つて寄こしたことを蘇峰は五十年後になつても、なお憶えていたからである。『徳富蘇峰 終戦後日記』IV 一七〇一「七」一頁。

- (47) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十二年七月十三日。
- (48) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十五年十二月九日。
- (49) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十四年一月九日。また三十三年十一月十日の同紙は「米國公使の談話」ハーリー・バックのインタビューカー記事を掲載している。
- (50) Buck to Tokutomi, 15 August 1902. 二宮・蘇峰記念館所蔵。
- (51) Ellen B. Buck to Tokutomi, November 1898. 二宮・蘇峰記念館所蔵。エレン・B・バックはバックの妻である。
- (52) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十五年十二月九日。
- (53) 明治三十五年十二月四日着電、内務大臣宛千葉県知事電報には「米國公使ハ……脳溢血ノ為メ卒倒シ治療ヲ施シタルモ其効ナク逝去セリ」とあるが、John Mackintosh Ferguson to Komura Jutarō, 4 December 1902には、バックの死因は「心臓麻痺」とある。その他に、明治三十六年一月十九日付、小村外相宛高平小五郎公使「前米國バツク氏遺骸到着ノ件」、明治三十六年一月二十一日起草、高平公使宛小村外相「米國公使バツク葬儀概況報告」など。以上いずれも『各国貴顯弔喪雑件（在本邦各国使臣之部）』第二卷、外務省外交史料館所蔵。
- (54) 明治三十六年一月二十一日起草、高平公使宛小村外相「米國公使バツク葬儀概況報告」。
- (55) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十五年十二月九日。
- (56) 『蘇峰翁自述』本文、第二回第八節、昭和二十年十一月二十九日午前口述部分。
- (57) 第一次桂内閣誕生後、蘇峰は桂首相と一体となつて日英同盟に向かつて邁進し、『国民新聞』紙上でイギリスとの同盟を説いたが、それだけでなくイギリスの文人、政治家をくり返し好意的にとり上げた。例えばジョン・ラスキン（John Ruskin）を描いた蘇峰生「ラスキン」（明治三十三年四月二十五日から連載開始）はその代表例である。またヴィクトリア女王（Alexandrina Victoria）の危篤に際しては「只だ御快復を万に祈る」とし、その崩御を聞くと「悲信に接し候」と慨嘆した（「東京だより」三十四年一月二十三日、二十四日）。またセシル・J・ローズ（Cecil John Rhodes）は「非凡な手腕と、より非凡な志望を有した巨人」であると、ラドヤード・キpling（Joseph Rudyard Kipling）の詩「白人の重荷」（"The White Man's Burden"）に対する、英國民の志を歌い

大英國民膨脹的精神を鼓吹したものとして、その一部を当意即妙であるとするなど、ポジティヴな評価を下している（蘇峰生「セシール、ローヴ」三十五年三月三十日、「東京だより」三十二年十一月十六日）。このように蘇峰は言論を通じて親英ムードを国内に流そうと試みた。なお日露戦争後、蘇峰はキプリング「白人の重荷」に反発を示すようになるが、それについては、平川祐弘「白人の重荷と黄人の重荷—キプリングと徳富蘇峰—」同『和魂洋才の系譜内と外からの明治日本』新装版（河出書房新社、一九八七年五月再版）所収を参照のこと。

(58) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十三年九月二十二日。その他にも蘇峰は「国交には純愛なし、他国に対する情誼も、自国の利益と両立するを以て、程限とせざる可らざるや論なく候」、「国際的交誼は、自国の利益以上に超越する能はずとは、歴史之を証し、事実之を明かし候」といった具合に、同様の主張をくり返し強調している。門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十三年八月二十四日、十二月十三日。さらに彼は次のように自国民を憂えている。「我が国民は敵とすれば、一から十迄、敵たらざるはなく。友とすれば、総ての点に於て、友たるが如き観をなせども、そは大なる了見違ひ也。敵も味方も程度あり、程度以上の味方もなき代りに、程度以上の敵もなし。」「商業上に於ける自恃の精神」『国民新聞』明治三十五年三月十五日社説。無署名であるが、文言、文体から蘇峰執筆と判断した。

(59) 『蘇峰翁自述』本文、第二回第一〇節、昭和二十年十一月二十九日午前口述部分。

(60) 拙著『近代日本人のアメリカ観』前編第一章、拙稿「徳富蘇峰の大日本膨脹論とアメリカ」。

(61) 拙稿「徳富蘇峰の大日本膨脹論とアメリカ」三三一四三頁。

(62) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十一年一月六日。

(63) 詩には拙訳をあてた。蘇峰生「国民の理想」『国民新聞』明治三十六年五月三日。

(64) 詩には拙訳をあてた。ホメロス著、松平千秋訳『イリアス』上、下（岩波書店・岩波文庫、一九九二年）を参照した。

(65) 蘇峰生「国民の理想」『国民新聞』明治三十六年五月三日。

(66) 蘇峰生「日英同盟の国民的性格に及ぼす影響如何」『国民新聞』明治三十五年二月十六日。

(67) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十六年七月二十四日。

- (68) 蘇峰生「惠磨遜」『国民新聞』明治三十四年七月二十八日。同じ文章が『人物偶評』、『蘇峰文選』（民友社、大正五年二月第七版）にも収録されている。
- (69) 徳富猪一郎演説「教育上より見たる個人の価値（一）」『国民新聞』明治三十四年十一月二十七日。麻布教育会において同年十一月九日に行つた講演筆記である。長文にわたる引用のため、文体を現代風に改め、読み易さをはかった。
- (70) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十二年十月八日。
- (71) 徳富猪一郎演説「教育上より見たる個人の価値（四）」『国民新聞』明治三十四年十一月三十日。
- (72) 「自力の福音」『国民新聞』明治三十六年七月三十日。無署名であるが、文言、文体から蘇峰執筆と判断した。
- (73) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十四年九月十七日、十一月十四日、三十五年一月二十三日。
- (74) 当該期の蘇峰はワシントン、リンカンにつきたびたび言及している。例えば国民叢書（民友社発行）を例にとると、ワシントンは『漫興雑記』（明治三十一年十一月）二六一二七頁、『処世小訓』（三十四年四月）八八一八九頁、リンカンは『第三日曜講壇』（三十六年一月）一九七一九八頁。またそれ以前においても、この二人を彼がとり上げることは多かつた。しかしながら後年の回想によれば、蘇峰はワシントンについてはそれほどの興味はなく、一方、リンカンは「頗る好き」であったという。『徳富蘇峰 終戦後日記IV』二七〇頁。
- (75) *Congressional Record, 57th Congress, 2nd Session, Vol. XXXVI, PartI, 7.*
- (76) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十六年一月十八日。
- (77) 同右。
- (78) 蘇峰生「力行論」『国民新聞』明治三十六年三月一日。
- (79) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十六年五月十二日、二十九日、八月十八日。
- (80) 蘇峰は「露国が満洲より撤退を躊躇しつゝも、其の実は永久占領の經營をなしつゝある」とは、殆んど公然の秘密に有之候と見抜いていた。門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十四年八月十三日。また彼は明治三十六年十月、「若し平和の手段、尼き果たるに於ては、更らに平和以外の手段に訴ふるも、亦た辞せざる也」、「イザ来れ、吾人は自から之〔戦争〕を挑発する者に与みせざるも、最後迄之を逃げ廻はるものには無御座候」としている。彼の

心の中や戦争の決意が固まるのはいの頃であつたといえる。門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十六年十月九日、二十一日。

- (81) Theodore Roosevelt, *The Strenuous Life: Essays and Addresses* (New York: The Century Co., 1901), 249. 財団法人石川文化事業財団・お茶の水図書館成實堂文庫所蔵の同書を閲覧した。
- (82) Ibid.
- (83) 徳富猪一郎演説「国民教育の方針（愛知師範同窓会総集会に於て）」(十四)『国民新聞』明治三十六年九月十六日。
- (84) 同右。
- (85) Roosevelt, *The Strenuous Life*, 214-215, 217. 明治三十二年四月になされたローズヴェルト演説である。
- (86) Ibid., 223.
- (87) Ibid., 252-254. 引用個所には青鉛筆によるサイドラインも引かれている。
- (88) (83)に同じ。
- (89) 蘇峰生「養力論」『国民新聞』明治三十六年八月九日。
- (90) 『聖書新共同訳』(日本聖書協会、一九八七年)所収、新約聖書一七一一八頁。
- (91) (89)に同じ。
- (92) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十六年十月九、二十一日。
- (93) ローズヴェルトのスピーチは「難局に処する国民の覚悟」『国民新聞』明治三十六年十月二十三日(無署名)に訳出されている。それを受けた蘇峰の意見は、門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十六年十月二十三日、蘇峰生「国民の鍛錬」『国民新聞』明治三十六年十月二十五日。
- (94) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十六年十一月五日。桂首相の政友でありながら」のよう発言を行つてゐることには、当然理由があつたのであろう。事前に桂と打ち合わせを行い、国内世論誘導のため故意に行つた可能性が考えられよう。
- (95) 門外漢「東京だより」『国民新聞』明治三十六年十一月十八日。
- (96) 『徳富蘇峰 終戦後日記IV』二七〇頁。